

# 北尾淳一郎資料について

佐々木明子

## I はじめに

平成 28 (2016) 年 3 月、宮崎県立美術館では、農学博士であり本県を代表する画家瑛九とのつながりも深い北尾淳一郎氏のご遺族から、同氏が残した原稿等の資料約 300 件の寄贈を受けた。主に北尾が執筆した資料を中心としたもので、大まかに瑛九に関する資料、それ以外のエッセイや評論等の資料、北尾の研究及び学校（宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校及び東京農工大学）関連の資料、私信等の資料の 4 つに分けることができ、それぞれ原稿、ノート、スケッチ、掲載紙・誌、ガリ版による印刷物などが含まれている。

本稿では、これらの資料の概要をまとめ、併せてその中のいくつかの資料から瑛九に関する考察を行った。

北尾淳一郎は、明治 29 (1896) 年愛媛県松山市に生まれ、東京帝国大学農学部（現東京大学農学部）を卒業後、大正 14 (1925) 年に宮崎高等農林学校に講師として赴任、翌年には教授となった。昭和 5 (1930) 年から、ドイツをはじめイタリア、フィンランドに留学し、同 8 (1933) 年に帰国後は、多くの学生の指導に当たると共に、農学博士として本県における動物学発展に貢献した。昭和 15 (1940) 年には東京高等蚕糸学校（現東京農工大学）に着任、最終的には同大繊維学部長を務めた。研究者である一方、芸術にも造詣が深く、研究上の必要で始めた写真については、後に瑛九と二人展を開いたり自由美術家協会展にて作品を発表したりしている<sup>1</sup>。

北尾が赴任した当時の宮崎市は、明治 6 (1873) 年の宮崎県設置により、現在地に置かれた県庁を中心に急速に発展した町で、北尾が赴任する前年に市制が施行され、近隣の三つの町村が合併してできた 4 万人程の小都市であった<sup>2</sup>。東京とは遠く離れ、まだ封建的な色合いも濃く残っていた宮崎の地において、北尾は先進的な知識人、文化人として、新聞などに多くの論説等を発表していた。

瑛九＝本名：杉田秀夫 (1911～1960) と出会ったのは、北尾が海外留学から帰国した翌年、38 歳のときである。一方の瑛九は 23 歳、画家を志して 14 歳から始めた東京での生活を切り上げ、落胆と焦りの中、宮崎に戻ったばかりであった。昭和 9 (1934) 年に宮崎市で初めて開催された大規模な展覧会「第 1 回宮崎美術協会展」をきっかけに二人は知り合い、その後互いに行き来し夜更けまで芸術論を語るなど、親交を深めていった。

当時、宮崎において理解者に恵まれなかった若き日の瑛九の作品を評価した初めての人物である北尾は、その後も宮崎での瑛九芸術のよき理解者として、多くの評論を発表するなどした。当時の宮崎県において、最高学府の教授であり知識人として一目置かれていた北尾の言葉は、瑛九を精神的に支えるとともに、その活動においても大きな支援となったに違いない。

---

<sup>1</sup> 鈴木素直、「画家・瑛九の世界—特に北尾淳一郎との関係について—」、『宮崎県地方史研究紀要 第二十二輯』、宮崎県立図書館、1996、130 頁

<sup>2</sup> 『宮崎市史 続編 (上)』、宮崎市、1978、283 頁、294 頁、370 頁

## II 北尾淳一郎資料の概要

冒頭述べたように、北尾資料は瑛九に関する資料、それ以外のエッセイや評論等の資料、北尾の研究及び学校関連の資料、私信等の資料からなっている。北尾による原稿とその成果物である印刷物が主だが、大学関連の資料には、研究論文や講義内容を記したノートのほか、事典から必要な内容をそのまま写したと思われる資料や学生のレポート、デッサンや模式図など、北尾自身が書いたものだけでなく、他者が記したのもやメモまで残されており、その形態や種類は多様である。

北尾は、生前に資料の多くを自らの手で整理していた。雑誌などの印刷物及び学校関係の資料を除く大半を、内容ごとに封筒にまとめ、その半数の封筒には整理ナンバーや表題を記すなどして、これらを皮革製の丈夫なトランク 2 つに保管しており、本資料を大切にしていたことがわかる。また、残された多くの原稿の末尾には日付及び執筆地が記されており、研究者としての北尾の態度や几帳面な人柄まで窺うことができる。

資料の整理に当たっては、北尾の分別を尊重し、個別の内容ごとに分けられた封筒を基本に分類を行った。前述の 4 つの分類ごとに、整理ナンバーの記載がある資料を軸に、それらに表題のみの資料や表題のない資料、封筒に入っていない資料を加えて分類を行った。整理ナンバーには、「1～28」のように一括して多数の内容をまとめているものもあり、ナンバーは残したまま内容ごとに分けた。また、複数の分類にまたがるものは、その内容や発行元等に応じ、最も関連の強い項目に入れて整理を行った。

### 1. 瑛九関連資料の概要

北尾資料の中で特筆すべきは、北尾が宮崎赴任時代に記した瑛九に関する一連の評論であり、19 件の原稿や印刷物等が残されていた。瑛九芸術への批評、宮崎市にて開催された展覧会や個展で発表された瑛九作品及び瑛九が主宰した美術団体に対する批評などの原稿及びその掲載紙・誌などである。これら戦前の資料は散逸により現存数が少なく、大変貴重なものと言える。

さらに、北尾が記した原稿の多くは万年筆で記されたもので、推敲が施されている。このため、校正前に書いた文章も読むことができ、印刷された完成稿からは見えない多くの情報を得ることができる。今後、原稿の詳細な調査や発表された完成稿との比較を通して、当時の瑛九やその周辺について見えてくるものがあるであろう。

前述したように、本分類には瑛九主宰の美術団体の活動について論じているものが含まれる。

「聖都宮崎市に於ける芸術運動概観」もその 1 つで、瑛九が友人らと結成した「ふるさと社」についてふれている。当時の宮崎県は、知事の相川勝六の強いイニシアチブのもと、昭和 12

(1937) 年に祖国振興隊と称する小中学生や男女青年団による勤労奉仕組織が結成され<sup>3</sup>、翌年には、「紀元 2600 年奉祝事業」に係る県奉祝会の事業として、宮崎市にある神武天皇の聖蹟伝承地に、神武建国の理想を形とする目的で八紘一字の題字を掲げた《八紘之其柱》<sup>あめつちのものはしら</sup>の建立が計画される<sup>4</sup>という状況にあった。日本が戦争に向かう中、皇祖発祥の地として高揚する宮崎県民の様子や、当時の瑛九を取り囲む社会の空気を理解するひとつの手がかりとなる。

<sup>3</sup> 『宮崎県史 通史編 近現代 2』、宮崎県、2000、348-349 頁

<sup>4</sup> 『宮崎県史 通史編 近現代 2』、宮崎県、2000、372-373 頁

この他、北尾が記したエッセイなどの原稿もあるが、その中では瑛九が「若き芸術家 S 氏」として登場しており興味深い。

これらの瑛九に関する資料は、戦前の瑛九像を明らかにする上で、まとまった形で残された非常に貴重な資料群といえる。

## 2. 瑛九関連以外のエッセイや評論等の資料

北尾は、論文やエッセイを多くの紙上で発表している。専門とした動物学や昆虫などのテーマのみならず、広い見識をもとに、礼儀やマナー、演劇や芸術など多彩な内容について、新聞や文芸誌などで発表している。留学したドイツでの経験を生かした文章も多く残しており、中でも宮崎県におけるヒトラーユーゲント関連の資料は歴史資料として貴重であろう。ナチスの青少年組織であるこの一団が、昭和 13 (1938) 年 10 月に本県を訪れた際に新聞紙上で紹介された論文<sup>5</sup>や、一団に贈呈された祖国振興隊の冊子・資料などから、準備・接待役としての北尾の深い関わりが窺える。

また、写真家として自由美術家協会に作品を発表した北尾は、自身が教壇に立った宮崎高等農林学校の美術展や、指導的立場にあった「台地社」という写真グループについての資料も残しており、興味深い。自然豊かな宮崎の風景に興味を持ち、自ら撮影した写真を資料として掲載した「自然科学並びに芸術的に見た宮崎地方」などの宮崎の風土に関する論文も数点発表している。

この他、北尾はいくつかのペンネームやイニシャルを使って発表しており、自筆の原稿から執筆者が北尾と判明した資料がいくつかあったことも記しておく。

## 3. 北尾の研究及び学校関連の資料

宮崎高等農林学校は大正 13 (1924) 年に設置され、北尾は翌年 4 月の開学前に宮崎に着任している。創立期メンバーの一人として学校の礎を築き、多くの学生の指導に尽力した。本分類には、論文や授業で使用するために記した資料の他、文献や事典などを書き写したもの、試験問題、学校行事に関する資料やメモなどが含まれる。研究のために北尾が描いたと思われる昆虫や人体の断面図などのスケッチや模式図なども見つかったが、バランス良く整ったその描写からは、芸術家北尾のセンスが垣間見える。

この他、学生の試験答案や論文、他の研究者の論文を考察のため書き写したと思われる文章もあるが、細かな調査には至っていない。

宮崎、東京時代を通して、北尾は学校関係の出版物（学報・新聞・会報等）に多くの論文を載せる他、短編小説やエッセイ、俳句、評論なども意欲的に発表している。時代背景を考えると、社会から教授である北尾に知識人や文化人としての発言が求められていたに違いないが、その数の多さや内容から見ると、本人の表現者・発信者としての自覚や欲求がより高かったであろうことが窺える。

## 4. 私信等の資料

わずかであるが、挨拶文や日記、北尾作品評などが残されている。この中には当用日記もあり、北尾が宮崎にて記した日々の考えや出来事を書き連ねた記載はもちろん、原稿の下書きなども含まれており、今後詳細な調査を進めていきたい。

---

<sup>5</sup> 「若き盟友喜び迎ふ日向路」、『宮崎新聞』、1938.10.24 (朝刊)、3 面

### Ⅲ 瑛九に関する考察

#### 「宮崎美術協会第一回作品展覧会を観る」の原稿から見えること

北尾と瑛九が知り合うきっかけとなったのは、前述したとおり「宮崎美術協会第1回作品展覧会」である。昭和9（1934）年は神武天皇御東遷2600年に当たる年で、宮崎県下で多くの記念事業等が企画され、本展もその一環として開催された<sup>6</sup>。

瑛九の友人であり、その生涯を丹念に調査し『瑛九 作品と評伝』を著した研究者でもある画家、山田光春（1912～1981）が初めて瑛九と出会ったのも、同協会発足の日であった<sup>7</sup>。その正確な日付は不明だが、山田の評伝によると土曜日であったらしい。協会発足を伝える記事が10月19日付の「宮崎新聞」に掲載されている点から、その前の土曜である10月6日もしくは13日に発足したと見られる。宮崎市内の文房具店に美術教員及び瑛九を含む若手美術家200人が集まったということから、当時の宮崎県において、かなり大規模な取り組みであったことは間違いない。そして、同月末には早くも展覧会が開催されている<sup>8</sup>。

この展覧会についての北尾の評論こそが、若き日の瑛九芸術を最初に評した「宮崎美術協会第一回作品展覧会感想」である。本論は新聞紙上で発表されており<sup>9</sup>、山田光春が、前述の評伝の中でその頃の様子や、北尾の評論について詳しく紹介している<sup>10</sup>。

この評論の掲載紙とその原稿とが、「宮崎美術協会第一回作品展らん会をみる」の表題を付けた封筒にまとめられている。興味深いのは、両資料の内容の相違である。仮名遣いや言葉の言い回しなどの若干の相違は除いて、内容的に大きく異なる部分が4箇所に見られる。

まず、ドイツ芸術について触れた内容が大きく追記されていること。次に、瑛九の作品評をはさんで前後に追記があること。そして、北尾が自身を「素人」と称する複数の部分がほぼ削られ、謙遜程度にかろうじて残った様な表現になっていること。最後に、他分野の芸術論を引き合いに出して論じた部分が削除されていることである。中でも特に注目すべきは、瑛九の作品評前後に追記がされていることであり、まずはこの点から、両資料に見られる相違について考察を試みた。なお、両資料については後に翻刻を付けた。

北尾により万年筆で書かれた原稿では、次のように瑛九の作品を評している。

杉田秀夫氏の習作 AB は素晴らしいものだ。油絵のほうではまず特選賞に値するものである。

ここには作品評以外の記述は見られない。その評ですら、いささか物足りなさを感じる程である。一方、紙面に掲載された評では、瑛九芸術への周囲の理解不足について嘆く文章が続いている。この変化にはいかなる経緯があったのであろうか。

この論文が紙上に掲載された際、その冒頭に、手違いのためすぐには発表されなかったことが記されており、展覧会開催・執筆から掲載されるまでの期間に追記があったと推測できる。前述の通り、相違が見られる箇所は瑛九の評だけではないため、本原稿が初期の段階のもので、その後推敲され掲載されたと見られる。しかし、瑛九が懇意にしていた友、藤田穎男の作品についての記載が

<sup>6</sup> 「文化の向上に献げる宮崎美術協会」、『宮崎新聞』、1934.10.19（夕刊）、2面

<sup>7</sup> 山田光春、『瑛九 評伝と作品』青龍洞、1976、23～24頁

<sup>8</sup> 「宮崎美術協会初の展覧会」、『宮崎新聞』、1934.10.20（夕刊）、2面

<sup>9</sup> 北尾淳一郎、「宮崎美術協会第一回作品展覧会感想」、『宮崎新聞』、1934.12.10（夕刊）、1面

<sup>10</sup> 山田光春、『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976、97～98頁

瑛九評の前に追加されている点からも、単なる文章の推敲だけでなく、瑛九との何らかの接点があったことにより、北尾が文章の内容を変更したと考えるのが自然ではなかろうか。

山田光春によれば、まだ瑛九とは面識もなかった北尾が、瑛九の作品を高く評価しただけでなく、その生活信条についても作品から見抜いた<sup>11</sup>ということであるが、果たしてそうであろうか。この時期の二人の動きを詳しくたどってみると、興味深い事実が見えてくる。

10月27日から31日まで、「宮崎美術協会第1回作品展覧会」が宮崎市内の丸三デパートにて開催され、瑛九はその会期中の10月29日に、杉田秀夫名義で同展についての概評及び個々の作品評を早々と発表している<sup>12</sup>。翌月23日から25日に、丸三デパートと西村楽器展を会場として開催された「第9回高等農林学校美術展」に北尾が写真作品を発表する。高等農林学校に勤務し本展の出品者でもある藤田穎男と瑛九は親しい間柄で、瑛九は同展を鑑賞後、閉幕翌日の26日には「高農美術展を見る」として同展の評を発表した<sup>13</sup>。瑛九は北尾の写真《試掘池》《延岡駅付近》に心を動かされたとして、北尾の芸術的感覚と聡明さを絶賛している。その二週間後の12月10日に、北尾は「宮崎美術協会展の感想」を発表、前述の通り、冒頭で展覧会直後に書いたが手違いで発表されなかったと述べている。

ここで気になるのは、宮崎美術協会展の感想を瑛九、北尾両名が同じ『宮崎新聞』紙上で発表している点である。当時宮崎としては初めての大規模な展覧会であったことは確かだが、果たして二名の論客に紙面を二度も使って論じさせるものであろうか。こう考えると、北尾がそもそも会期後に原稿を書いていたのかという疑念も抱かざるを得ない。あいにく、他の北尾の多くの原稿に記載されている執筆日は記されていない。しかし、作品自体への評価には一切手加えられておらず、「芸術家瑛九」に対する無理解を嘆く文章が追加されていることから、原稿は瑛九と知り合う前に書かれ、その後手元にある間に瑛九と出会い、瑛九の理念や進歩的で豊かな知識、理解者に恵まれぬ様子などを直接、もしくは情報として北尾が知ることとなり、加筆したと考えることが可能であろう。

では、実際のところ二人はいつどのように知り合ったのであろうか。

山田はその著書で次の様に述べている<sup>14</sup>。

こうしたことがあってのち間もなく開かれた宮崎高等農林学校の美術展に出品した北尾の写真作品を見た彼が、その出来ばえを次のように讃え、そうしたことによって彼等は深く結びつけられていった。(中略) そうした北尾と彼との親交は次第に深まり、翌年二月にはぼくへの手紙に“北尾先生の所へ行ってビールをのまされ、画集をみせてもらって、写真の批評をオオセつかったりしている”などと書くような間柄になっていった。

この記述によると、二人は11月26日付紙面における瑛九の北尾評以降、交流を深めていったようである。同紙面にて瑛九は北尾の作品のみならず、その芸術に対する意識や理解をも賞賛していることから、藤田と連れ立った瑛九が会場で北尾と出会い、言葉を交わした可能性も考えられなくはない。

高農展は、油絵部門を美術協会展と同じく丸三デパートで、写真部門を西村楽器展にて開催している。西村楽器店は、この翌年、前述した「ふるさと社」の展覧会場となった場所で、店主の池田

---

<sup>11</sup> 山田光春、『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976、98頁

<sup>12</sup> 杉田秀夫、「宮崎美術協会第一回展を評す」、『宮崎新聞』1934.10.29(夕刊)、1面

<sup>13</sup> 杉田秀夫、「高農美術展を見る」、『宮崎新聞』、1934.11.26(夕刊)、1面

<sup>14</sup> 山田光春、『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976、98～99頁

銅土郎の厚意により毎月無料で会場の提供をして貰う<sup>15</sup>など、瑛九にとってなじみの深い場所である。この楽器店も丸三デパートも、瑛九の家から近い場所に存在していた。

山田によると、美術協会が開催されたこの年の暮れには北尾がふるさと社に参加しないという意向を瑛九が確認している<sup>15</sup>ことから、12月には既に二人がそうしたことを話し合う間柄になっていたことが推測できる。

11月に開催された高農展の前後に二人が出会ったのなら、12月に発表されることになる北尾の美術協会展評は未だ手元にあり、瑛九との出会いによって北尾の芸術論が整理または補完され、追記につながったことが十分に想像できる。

瑛九との出会いによって北尾が文章を書き直したと仮定し、改めて原稿と完成稿に見られた相違点を確認してみる。

原稿では、幾度も自身のことを「絵画については素人」と評し、絵画論ではなく音楽や文学といった他分野の芸術を引き合いに出して例えていることから、絵画を論じることについて、北尾に自信がなかった様子が見てとれる。しかし完成稿ではこれらが削除され、北尾が最も自負を持っていたであろうドイツ芸術を例に引いて絵画論を展開しており、力強い論調へと変わっている。

また、原稿では自身が身を置く写壇に比べて画壇の先進性を羨む記述があるが、完成稿では削除されており、これを覆すような画壇に対する新たな知識をこの時期に得たことが窺える。何より瑛九評の前後に、藤田穎男を含む二人についての評が加筆され、展覧会に出品されてない作品にまで言及されていることから見ても、瑛九の影響があったと考えるのが妥当であろう。

原稿及び完成稿にも、本評は依頼されたものと記されている。北尾は新聞社の依頼によって美術協会展の評論を書いたものの納得できず、世に出さないことを決めたのではないかと。それで、改めて依頼された瑛九が展覧会評を書いたのではないだろうか。このように考えると、北尾と瑛九という二人の論客により一つの展覧会の評が書かれたことも十分に納得できる。

そうだとすると、時期を逸しそのまま埋もれるはずの原稿が、紙上に掲載されたのはなぜであろうか。ここにこそ、北尾の強い意志が見られはしないか。その胸中を推し量るに、高農展の前後の時期に瑛九と出会い、この若者が15歳も年下でありながら、先進的だと自負のある己を感嘆させる程の知識や先見性を持った希有な芸術家であったことや、宮崎での彼への無理解が示す旧態依然とした宮崎の現状などが、一度は埋もれた本稿を世に出す原動力となったのではないかと。「宮崎美術協会第一回作品展覧会を観る」の原稿と完成稿の相違点からは、北尾の若き芸術家瑛九に抱いた尊敬の念と、彼を支援したいという強い意志が読み取れる。

北尾が残した資料については、整理と調査を始めたばかりである。後の一覧に掲載はしているが、学校関係の資料、学術関連の資料などについては、詳細な内容の把握にまで至っていない。これらの資料は、瑛九をはじめ北尾や他の作家等の活動を検証する上で重要な資料であるとともに、宮崎の近代史や学術史などを語る上でも貴重な資料である。本稿を機に、多くの研究者による研究が発展すること、瑛九や北尾淳一郎の宮崎での活動について一層明らかにされることを願ってやまない。

最後に、貴重な本資料をご寄贈いただいた北尾氏ご遺族に深く感謝の意を表す。

---

<sup>15</sup> 山田光春、『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976、114頁

## 参考文献

- ・鈴木素直、「画家・瑛九の世界—特に北尾淳一郎との関係について—」、『宮崎県地方史研究紀要 第二十二輯』、宮崎県立図書館、1996、125～143 頁
- ・山田光春、『瑛九 評伝と作品』、青龍洞、1976
- ・五十殿利治、『非常時のモダニズム』、東京大学出版会、2017
- ・『宮崎市史 続編（上）』、宮崎市、1978、294 頁、370 頁
- ・「ヒットラー・ユーゲント」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012441200、各国少年団及青年団関係雑件 第二卷（1-1-10-0-4\_002）外務省外交史料館
- ・「藝術的に観た宮崎地方の風景」『宮崎新聞』、1938. 10. 9（夕刊）、2 面
- ・「若き盟友喜び迎ふ日向路」、『宮崎新聞』、1938. 10. 24（朝刊）、3 面
- ・『宮崎県史 通史編 近現代 2』、宮崎県、2000、348～349 頁、372～373 頁
- ・「文化の向上に献げる宮崎美術協會」、『宮崎新聞』、1934. 10. 19（夕刊）、2 面
- ・宮崎美術協會初の展覧會、『宮崎新聞』、1934. 10. 20（夕刊）、2 面
- ・杉田秀夫、「宮崎美術協會第一回展を評す」、『宮崎新聞』、1934. 10. 29（夕刊）、1 面
- ・「宮崎高農美術展」、『宮崎新聞』、1934. 11. 16（夕刊）、2 面
- ・杉田秀夫、「高農美術展を見る」、『宮崎新聞』、1934. 11. 26（夕刊）、1 面
- ・北尾淳一郎、「宮崎美術協會第一回作品展覧會感想」、『宮崎新聞』、1934. 12. 10（夕刊）、1 面
- ・杉田秀夫、「高農美術展を見る」、『宮崎新聞』、1934. 11. 26（夕刊）、1 面

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
環九関連資料										
1	1~28	※表題なし		原稿10枚(400字原稿)	或る日曜日	1939(S14)/6/15	1	北方一郎	下書き 北方一郎(北尾ペンネームか) 文中に「二年越しに東京から帰ってきた若い美術批評家S氏」 環九がモデルか	宮崎
2	1~28	※表題なし		原稿3枚(200字原稿)			1	北尾淳一郎	No.8の一部差替え文か	
3	173	ある日曜日	1	原稿15枚(200字原稿)	或る日曜日		1	北岡醇 北尾淳一郎	下書き 北岡醇(北尾ペンネーム案か)	
			2	原稿2枚(200字原稿)			1	北尾淳一郎か	下書き No.10-1のP.12、13の差替文	
			3	原稿10枚(400字原稿)	或る日曜日	1939(S14)/6/15	1	北方一郎	北方一郎(北尾ペンネームか)	
4	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	ふるさと舍同人展(上)	1935(S10)/4/20	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	富松、藤田、山田らの作品を批評	
5	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	ふるさと舍同人展(下)	1935(S10)/4/22	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	杉田秀夫氏の芸術的態度～	
6	Noなし	ふるさと社二回展感想		原稿8枚(400字原稿)	ふるさと社二回展感想		1	北尾淳一郎	杉田秀夫氏の芸術的態度～	
7	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	第二回宮崎美術協会展(上)	1935(S10)/6/20	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
8	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	第二回宮崎美術協会展(中)	1935(S10)/6/21	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
9	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	第二回宮崎美術協会展(下)	1935(S10)/6/22	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	杉田秀夫氏「濱邊にて」は、中央美術展に出品されたもので～	
10	Noなし	第二回宮崎美術協会展		原稿12枚(400字原稿)	第二回宮崎美術協会展	1935(S10)/6/17	1	北尾淳一郎	杉田秀夫氏「濱邊にて」は、中央美術展に出品されたもので～	
11	29~81	※表題なし		原稿4枚(400字原稿)	下町の記憶	1939(S14)/11/26	1	北尾淳一郎	妻町が舞台か 文中に「Sさんの親友の若い芸術家のSさん」 山田光春と環九がモデルか	
12	88~89	※表題なし		原稿14枚(400字原稿)	H町の印象	1939(S14)/7/22	1	北尾淳一郎	文中に「東京に居る芸術家のS」 環九がモデルか	宮崎
13	Noなし	宮崎美術協会第一回作品展ら ん会をみる	1	原稿8枚(400字原稿)	宮崎美術協会第一回作品展覧会を観る		1	北尾淳一郎	環九内容に追記して新聞掲載	
			2	夕刊『宮崎新聞』	宮崎美術協会第一回作品展覧会感想	1934(S9)/12/10	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	文末に1934.12.7 宮崎に於ける国際語運動『ザメンホフの 夕を前にして』杉田秀夫 同紙面同ページに掲載	
14	Noなし	環九氏の事ども		印刷物(46.3×28.8)	環九氏の事ども	1936(S11)/6/7	2	北尾淳一郎		
15	Noなし	ふるさと社五回展	1	原稿12枚(400字原稿)	ふるさと社五回展	1937(S12)/2/28	1	北尾淳一郎	太佐、三岸作品展示に関する評	
			2	折り版9枚(自表紙1枚含)24.3×33.4	ふるさと社五回展	1937(S12)/2/28	1	北尾淳一郎		宮崎
			3	日刊『宮崎新聞』	ふるさと社五回展	1937(S12)/3/3	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
			4	日刊『宮崎新聞』	ふるさと社五回展(二)	1937(S12)/3/4	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
			5	日刊『宮崎新聞』	ふるさと社五回展(三)	1937(S12)/3/5	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
16	Noなし	環九氏と天才	1	原稿4枚(400字原稿)	環九氏と天才	1939(S14)/6/3	1	北尾淳一郎	環九個人展會期6/9(招待日)～12 会場 宮崎市橋通3丁目大阪朝日新聞社 販売店樓上	宮崎
			2	日刊『宮崎今日』	環九氏と天才	1939(S14)/6/8	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
17	Noなし	一ツ葉浜		『龍舌蘭7』	一ツ葉濱	1939(S14)/10/10	1	北尾淳一郎/龍舌蘭発行所	表紙:北尾淳一郎『詩人の感覚器』 他 中村地平、富松良夫ら 『一ツ葉濱』文中に「若い藝術家Sさん」 環九か	
18	Noなし	芸術家としての環九氏	1	原稿9枚(400字原稿)	藝術家としての環九氏	1949(S24)/11/3	1	北尾淳一郎		小金井
			2	『藝術家 環九』	藝術家としての環九氏	1950(S25)/1	1	北尾淳一郎/ 宮崎市廣島通ひまわり商會内 環九後援會	他に長谷川、久保、外山の文有り 編集兼発行人 内田耕平	
19	Noなし	聖都宮崎市に於ける芸術運動 の概観		原稿5枚(400字原稿)	聖都宮崎市に於ける芸術運動の概観	1953/1/13 が 二重線で削除	1	北尾淳一郎	宮崎市に於ける芸術運動の中心勢力はし かし乍ら結局、環九氏の偉大な芸術的 ～	
環九関連以外のエッセイや評論等の資料										
20	1~28	※表題なし		国立公園協會宮崎支部會報『霧嶋』 昭和十年新年號第二卷第一號	公園の使命と、都市計劃の基準	1935(S10)/1/1	1	北尾淳一郎/ 宮崎縣廳公園課内 国立公園協會宮崎支部	回覧用紙1枚付	
21	Noなし	公園の使命と都市計劃の基準	1	原稿6枚(400字原稿)	公園の使命と都市計劃の基準	1932(S7)/12/11	1	北尾淳一郎		
			2	国立公園協會宮崎支部會報『霧嶋』 昭和十年新年號第二卷第一號	公園の使命と、都市計劃の基準	1935(S10)/1/1	1	北尾淳一郎/ 宮崎縣廳公園課内 国立公園協會宮崎支部		
22	1~28	※表題なし		『祖國振興隊要項』獨譯 學報第二十五號別刷	Die "SOKOKU-SINKOO-TAI", eine Vereinigung der Jugend von ganz Miyazaki-Ken zum heimatlichen Arbeitsdienste	1938(S13)/3/15	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林學校校友會		
23	Noなし	祖國振興隊要項独訳		『祖國振興隊要項』獨譯 學報第二十五號別刷	Die "SOKOKU-SINKOO-TAI", eine Vereinigung der Jugend von ganz Miyazaki-Ken zum heimatlichen Arbeitsdienste	1938(S13)/3/15	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林學校校友會		
24	Noなし	重複		冊子『WILLKOMMEN HITLER- JUGEND!』	"SOKOKU-SINKOO-TAI", eine Vereinigung der Jugend von ganz Miyazaki-Ken zum heimatlichen Arbeitsdienste		1	北尾淳一郎	VON PROF.DR.Z.KITAO 1938	
25	Noなし	重複 (縦横學部長殿)用封筒		冊子『WILLKOMMEN HITLER- JUGEND!』	"SOKOKU-SINKOO-TAI", eine Vereinigung der Jugend von ganz Miyazaki-Ken zum heimatlichen Arbeitsdienste		3	北尾淳一郎	VON PROF.DR.Z.KITAO 1938	
26	1~28	※表題なし		原稿25枚(200字原稿)	『世界漫歩』を讀む	1939(S14)/12/14	1	北尾淳一郎	『世界漫歩』を讀む 廿五頁 龍舌蘭第8輯 昭和十五年一月五日発行 第三卷第一号 と別表紙に表書・朱書有	宮崎
27	Noなし	「世界漫歩」を讀む	1	『龍舌蘭8』	『世界漫歩』を讀む	1940(S15)/1/5	1	北尾淳一郎/龍舌蘭発行所	表紙でサイン:北尾淳一郎、 環九『未熟語』含	
			2	国立公園協會宮崎支部會報『霧嶋』昭和 十年夏季特別號第二卷第三號	風景の觀賞	1935(S10)/7/25	1	北尾淳一郎/ 宮崎縣廳公園課内 国立公園協會宮崎支部		
28	Noなし	風景の觀賞	1	原稿6枚(400字原稿)	風景の觀賞	1935(S10)/6/11	1	北尾淳一郎	下書き	
			2	清書原稿12枚(200字原稿)	風景の觀賞	1935(S10)/6/11	1	北尾淳一郎	清書 風景の觀賞 十二頁記載表紙付	
			3	国立公園協會宮崎支部會報『霧嶋』昭和 十年夏季特別號第二卷第三號	風景の觀賞	1935(S10)/7/25	2	北尾淳一郎/ 宮崎縣廳公園課内 国立公園協會宮崎支部	文末に 一九三五年六月十二日 と記載	
29	1~28	※表題なし		『鹿児島新聞』宮崎版	虎の話	1938(S13)/1/1	1	北尾淳一郎/鹿児島新聞社		
30	Noなし	虎の話		原稿4枚(400字原稿)	虎の話	1937(S12)/12/27	1	北尾淳一郎		宮崎
31	1~28	※表題なし		日刊『宮崎今日』	映畫『大地』を見る(一)	1938(S13)/2/15	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
32	1~28	※表題なし		日刊『宮崎今日』	映畫『大地』を見る(二)	1938(S13)/2/16	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
33	1~28	※表題なし		日刊『宮崎今日』	映畫『大地』を見る(三)	1938(S13)/2/17	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
34	1~28	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	聖戦下の虫展で學問の新秩序を普及(上)	1938(S13)/1/19	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
35	1~28	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	聖戦下の虫展で學問の新秩序を普及(中)	1938(S13)/1/20	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
珠九関連以外のエッセイや評論等の資料										
36	1~28	※表題なし		『龍舌蘭』第6輯	聖戦下の展展で學問の新秩序を普及(完)	1938(S13)/1/22	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
37	1~28	※表題なし		原稿6枚(400字原稿)	ポオルとヴィルジニイ	1939(S14)/6/11	1	北尾淳一郎	ポオルとヴィルジニイ 十七頁 龍舌蘭第6輯 昭和十四年七月五日発行 第二巻第二号 と別表紙に表書・朱書有	
38	Noなし	ポオルとヴィルジニイ		『龍舌蘭』第6輯	ポオルとヴィルジニイ	1939(S14)/7/5	2	北尾淳一郎/龍舌蘭発行所	内1部には、赤字で「これ一冊歯科残つて あませんので〜」と記載	
39	1~28	※表題なし		原稿9枚(400字原稿)	藝術と藝術家	1939(S14)/10/2	1	北尾淳一郎		宮崎
40	1~28	※表題なし		原稿13枚(400字原稿)	雀の学校	1946(S21)/1/14	1	北尾淳一郎		
41	Noなし	雀の学校		1 原稿(縦罫線)6枚+(400字原稿)8枚 2 原稿用紙12枚(400字原稿)	(武蔵野)雀の学校 雀の学校	1946(S21)/11/14	1	北尾淳一郎	下書き	
42	1~28	※表題なし		『蜚龍』創刊號	教養と云ふこと	1946(S21)/11/14	1	北尾淳一郎/養蚕科機関誌	清書	
43	Noなし	教養と云ふこと		1 原稿3枚(400字原稿) 2 原稿3枚(400字原稿)	教養と云ふこと 教養と云ふこと	1946(S21)/11/20	1	北尾淳一郎	下書き	
44	1~28	※表題なし		原稿3枚(400字原稿)	近頃感じたこと	1950(S25)/9/15	1	北尾淳一郎		小金井
45	Noなし	近頃感じたこと		1 原稿3枚(400字原稿) 2 ガリ版冊子『雑木林』第3号	近頃感じたこと 近頃感じたこと	1950(S25)/9/15	1	北尾淳一郎		小金井
46	1~28	※表題なし		週刊『日本蜚龍新聞』	飲食の辯	1955(S30)/1/19	1	北尾淳一郎/ 日本蜚龍新聞社		
47	Noなし	飲食の弁		原稿3枚(400字原稿)	飲食の弁	1954(S29)/12/11	1	北尾淳一郎		三鷹
48	1~28	※表題なし		『報知新聞』	娯楽と休養	1941(S16)/8/14	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
49	Noなし	娯楽と休養		原稿3枚(200字原稿)	娯楽と休養	1941(S16)/8/6	1	北尾淳一郎		三鷹
50	1~28	※表題なし		『報知新聞』	煙草(上)	1941(S16)/7/29	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
51	1~28	※表題なし		『報知新聞』	煙草(下)	1941(S16)/7/31	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
52	Noなし	煙草の弁		原稿21(200字原稿)	煙草の辯		1	北尾淳一郎		
53	1~28	※表題なし		リーフレット 外:名勝地案内要圖 内:名勝地案内(記念式當日の午後)			2		第三班 案内主任 北尾淳一郎	
54	Noなし	名勝地案内		リーフレット 外:名勝地案内要圖 内:名勝地案内(記念式當日の午後)			2		第三班 案内主任 北尾淳一郎	
55	29~81	※表題なし		原稿11枚(400字原稿)	姫原郷	1929(S4)/7/12	1	北尾淳一郎		
56	Noなし	姫原郷		原稿22枚(200字原稿)	姫原郷	1929(S4)/7/12	1	北尾淳一郎		
57	29~81	※表題なし		月刊雑誌『道頓堀』 第五十七號第六年六月號	“蝶々夫人”を観る	1931(S6)/6/1	1	北尾淳一郎/ 松竹土地建物興業株式会社道 頓堀編輯部	拍林より特信 好劇子名(北尾ペンネーム か)	
58	150	「蝶々夫人」を見る		原稿(ノート7頁)(26.8×20.8)	“蝶々夫人”を観る		1	北尾淳一郎		
59	Noなし	重複		3 月刊雑誌『道頓堀』 第五十七號第六年六月號	“蝶々夫人”を観る	1931(S6)/6/1	1	好劇子/ 松竹土地建物興業株式会社道 頓堀編輯部	拍林より特信 好劇子(北尾ペンネームか)	
60	107	Ich sah,, Madame butterfly		原稿2枚(横罫線ノート8頁)	Ich sah “Madame butterfly”		1	北尾淳一郎	全て独語「蝶々夫人を観る」	
61	29~81	※表題なし		『日向』(郷土志資料)第十四輯 1 原稿11枚(400字原稿)	日本の風景の特色 日本の風景の特色	1934(S9)/5/1	1	北尾淳一郎/日向郷土會		
62	Noなし	日本の風景の特色		2 冊子『日本の風景の特色』學報第十八號 別刷	日本の風景の特色		1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林學校校友會	(日向第十四輯所載)と記載有り	
63	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	猪の話(上)	1935(S10)/1/1	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	北尾の写真「鶴の島」挿画	
64	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	猪の話(下)	1935(S10)/1/3	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
65	Noなし	猪の話		原稿8枚	猪の話	1934(S9)/12/25	1	北尾淳一郎		
66	29~81	※表題なし		『所謂公園的施設について』 日向第十五輯別刷	所謂公園的施設について	1935(S10)/2/1	1	北尾淳一郎/日向郷土會	赤枝正文字入り 文未昭和九年十一月十三日と表記	
67	Noなし	所謂公園的施設に就いて		1 原稿10枚(400字原稿) 2 『所謂公園的施設について』 日向第十五輯別刷	所謂公園的施設について 所謂公園的施設について	1934(S9)/11/3	1	北尾淳一郎	宮崎県庁や橋樑、植並木、神武前の桜並 木、公会堂等について論述	
68	29~81	※表題なし		『鹿児島新聞』	鼠の話	1936(S11)/1/1	1	北尾淳一郎/鹿児島新聞社		
69	Noなし	鼠の話		原稿3枚(400字原稿)	鼠の話		1	北尾淳一郎		
70	29~81	※表題なし		リーフレット「藤田穎男油繪作品展」 (15.7×23.0)三つ折り	藤田穎男氏の作品に就て		1	北尾淳一郎	他3名(富松、杉田(瑛九)、豊藤)の文章も 掲載 会場:アルト 9月25日~10月10日	
71	Noなし	藤田穎男氏の作品について		原稿2枚(23×23字)	藤田穎男氏の作品に就いて	1936(S11)/9/26	1	北尾淳一郎		
72	29~81	※表題なし		ガリ版6枚(27.8×39.4)	十一回高農美術展	1936(S11)/11/8	1	北尾淳一郎		
73	Noなし	十一回高農美術展		1 原稿12枚(400字原稿) 2 ガリ版 6枚 3 日刊『宮崎新聞』 4 日刊『宮崎新聞』 5 日刊『宮崎新聞』 日刊『宮崎新聞』	十一回高農美術展 十一回高農美術展 第十一回高農美術展(一) 第十一回高農美術展(二) 第十一回高農美術展(三) 第十一回高農美術展(四)	1936(S11)/11/8 1936(S11)/11/8 1936(S11)/11/21 1936(S11)/11/22 1936(S11)/11/23 1936(S11)/11/25	1 2 1 1 1 1	北尾淳一郎 北尾淳一郎 北尾淳一郎/宮崎新聞社 北尾淳一郎/宮崎新聞社 北尾淳一郎/宮崎新聞社 北尾淳一郎/宮崎新聞社	部分 部分 部分 部分	
74	29~81	※表題なし		ガリ版5枚(28.2×40.5)	高眞同好会二回展	1936(S11)/11/30	1	北尾淳一郎		宮崎
75	Noなし	写真同好会2回展		1 原稿6枚(400字原稿) 2 ガリ版5枚綴(28.2×40.3)	高眞同好会二回展 高眞同好会二回展	1936(S11)/11/30	4	北尾淳一郎		宮崎
76	29~81	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	『うし』の動物學的觀察	1937(S12)/1/1	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
77	Noなし	うしの動物學的觀察		原稿用紙10枚(400字原稿)	『うし』の動物學的觀察	1936(S11)/12/18	1	北尾淳一郎		
78	29~81	※表題なし		原稿11枚(400字原稿)	ナチス獨逸に於ける日常生活	1937(S12)/11/9	1	北尾淳一郎		
79	Noなし	ナチス獨逸に於ける日常生活		原稿12枚(400字原稿)	ナチス獨逸に於ける日常生活	1937(S12)/11/9	1	北尾淳一郎	宮崎市黒迫町二丁目五十一番地 北尾住所記載か	宮崎
80	29~81	※表題なし		日刊新聞『戦車』	趣意書	1937(S12)/12/10	1	北尾淳一郎/戦車新聞社	高眞藝術家とて畫家の集まり 臺地社新しく誕生(開催記事)	
81	Noなし	臺地社写真藝術研究会 設立趣意書		1 原稿4枚(400字原稿) 2 印刷物 三つ折り(15.6×31.2) 内側:趣意書 外側:目録	臺地社高眞藝術研究会設立趣意書 内側:臺地社高眞藝術研究会設立趣意書 外側:臺地社一回展(高眞繪畫)	1937(S12)/12/6	1	北尾淳一郎	宮崎市黒迫町二丁目五十一番地 北尾淳一郎と記載	
82	29~81	※表題なし		『自然科学的並びにに藝術的に見た宮崎 地方の風景』 宮崎縣教育十一月號別刷	自然科学的並びにに藝術的に見た宮崎地方の風景		1	北尾淳一郎/宮崎縣教育會	會場 山形屋百貨店四階 期日 12/9~14 珠九(顧問)出品ナシ	日本學術協會第十四回大會通俗講演 1938.10.5

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地	
環九関連以外のエッセイや評論等の資料											
83	Noなし	自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景	1	原稿37枚(400字原稿)	日本学術協会第十四回大会宮崎通俗講演会講演(十月十七日)「自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景」	1938(S13)/10/5	1	北尾淳一郎		宮崎	
			2	『自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景』日本学術協会報告第14巻第1號別刷	自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景	1939(S14)/4	3	北尾淳一郎/日本学術協会	※昭和13年10月17日宮崎市に於ける講演文末1938.10.5と記載		
			3	日本学術協会第十四回大会通俗講演『自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景』(宮崎縣教育十一月號別刷)	自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景		2	北尾淳一郎/宮崎縣教育會	文末1938.10.5と記載		
84	Noなし	重複(織維學部長殿)用封筒	1	日本学術協会第十四回大会通俗講演『自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景』(宮崎縣教育十一月號別刷)	自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景		6	北尾淳一郎/宮崎縣教育會	文末1938.10.5と記載		
85		※封筒なし	3	日本学術協会第十四回大会通俗講演『自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景』(宮崎縣教育十一月號別刷)	自然科学的並びに芸術的に見た宮崎地方の風景		1	北尾淳一郎/宮崎縣教育會	文末1938.10.5と記載		
86	29~81	※表題なし		1	日刊『宮崎新聞』	ヒツラ-ユウゲントを迎へての感想	1938(S13)/10/28	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	團長シムルツ氏は世界唯一の日本理解者北尾氏手記と紹介	
87	Noなし	ヒツラ、ユウゲントを迎へての感想	1	原稿4枚(400字原稿)	ヒツラ、ユウゲントを迎へての感想	1938(S13)/10/27	1	北尾淳一郎		宮崎	
			2	日刊『宮崎新聞』	ヒツラ、ユウゲントを迎へての感想	1938(S13)/10/28	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	團長シムルツ氏は世界唯一の日本理解者北尾氏手記と紹介		
			3	日刊『宮崎新聞』	「自然科学的並びに芸術的地位から見た宮崎地方の風景」※同講話内容について掲載	1938(S13)/10/24	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	喜び迎ふ日向路宇内に冠絶した大風景の聖地 古州を語る北尾博士		
88	29~81	※表題なし		1	『デュルクハイム教授の印象』宮崎縣教育一月號別刷	デュルクハイム教授の印象	1938(S13)/11/12	1	北尾淳一郎/宮崎縣教育會		
89	Noなし	※表題なし		1	『デュルクハイム教授の印象』(宮崎縣教育一月號別刷)	デュルクハイム教授の印象		1	北尾淳一郎/宮崎縣教育會		
90	Noなし	デュルクハイム教授の印象	1	原稿49枚(400字原稿)	デュルクハイム教授の印象	1938(S13)/11/12	1	北尾淳一郎			
			2	『デュルクハイム教授の印象』宮崎縣教育一月號別刷	デュルクハイム教授の印象	1938(S13)/11/12	3	北尾淳一郎/宮崎縣教育會	内一冊は別表紙にて綴られ、印刷二四頁と記載		
91	29~81	※表題なし		1	原稿7枚(400字原稿)	老人と青年	1938(S13)/12/27	1	北尾淳一郎		
92	Noなし	老人と青年	1	原稿7枚(400字原稿)	老人と青年	1938(S13)/12/27	1	北尾淳一郎		宮崎	
			2	日刊『宮崎新聞』	老人と青年	1939(S14)/1/1	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社			
93	29~81	※表題なし		1	日刊新聞『戦車』	獨逸のお正月	1939(S14)/1/1	1	北尾淳一郎/戦車新聞社		
94	Noなし	獨逸のお正月	1	原稿10枚(400字原稿)	獨逸のお正月	1938(S13)/12/18	1	北尾淳一郎	獨逸のお正月 十九頁 記載の表紙付		
			2	日刊新聞『戦車』	獨逸のお正月	1939(S14)/1/1	2	北尾淳一郎/戦車新聞社			
95	29~81	※表題なし	1	日刊『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(一)	1939(S14)/1/5	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			2	日刊『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(二)	1939(S14)/1/7	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			3	日刊『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(三)	1939(S14)/1/8	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			4	日刊『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(四)	1939(S14)/1/10	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			5	日刊『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(五)	1939(S14)/1/11	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
96	Noなし	ヒツラ、ユウゲントの感想	1	原稿13枚(400字原稿)	ヒツラ、ユウゲントの感想	1938(S13)/12/18	1	北尾淳一郎			
			2	新聞『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(一)	1939(S14)/1/5	2	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			3	新聞『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(二)	1939(S14)/1/7	2	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			4	新聞『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(三)	1939(S14)/1/8	2	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			5	新聞『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(四)	1939(S14)/1/10	2	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			6	新聞『宮崎今日』	ヒツラ、ユウゲントの感想(五)	1939(S14)/1/11	2	北尾淳一郎/宮崎今日社			
97	29~81	※表題なし		1	『宮崎縣教育』七月號第四六七號	日向の史蹟と風景	1939(S14)/7/5	1	北尾淳一郎/宮崎縣教育會		
98	Noなし	日向の史蹟と風景		1	原稿5枚(400字原稿)	日向の史蹟と風景		1	北尾淳一郎	昭和14年6月5日午後6時25分より55分迄30分間宮崎局から全九州へ放送 検閲済み有り	
99	Noなし	日向の史蹟と風景	1	原稿21枚(400字原稿)	日向の史蹟と風景		1	北尾淳一郎	上記の下書き		
			2	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(一)	1939(S14)/6/23	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			3	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(一)	1939(S14)/6/24	1	北尾淳一郎/宮崎今日社	(一)は誤植か		
			4	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(三)	1939(S14)/6/25	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			5	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(四)	1939(S14)/6/27	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			6	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(五)	1939(S14)/6/28	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
			7	日刊『宮崎今日』	日向の史蹟と風景(完)	1939(S14)/6/29	1	北尾淳一郎/宮崎今日社			
100	29~81	※表題なし		1	原稿4枚(400字原稿)	赤江濱	1939(S14)/8/9	1	北尾淳一郎		
101	Noなし	赤江濱	1	原稿4枚(400字原稿)	赤江濱	1939(S14)/8/9	1	北尾淳一郎	下書き		
			2	原稿13枚(400字原稿)	赤江濱	1939(S14)/8/9	1	北尾淳一郎	清書『新風土』九月号原稿と記載有り		
102	29~81	※表題なし		1	原稿13枚(400字原稿)	服装の問題(家庭講座)	1939(S14)/9/24	1	北尾淳一郎		
103	29~81	※表題なし		1	『新風土』十月號 聖地日向特輯	椎葉山	1939(S14)/10/1	1	北尾淳一郎/小山書店内 新風土社		
104	Noなし	椎葉山	1	原稿11枚(400字原稿)	椎葉山	1939(S14)/9/2	1	北尾淳一郎	下書き	宮崎	
			2	原稿21枚(200字原稿)	椎葉山		1	北尾淳一郎	清書 雑誌「新風土」と朱書き有		
105	29~81	※表題なし		1	原稿4枚(400字原稿)	藝術と全体主義	1940(S15)/9/7	1	北尾淳一郎	自由美術機関誌と別綴表紙に赤で記載	
				2	原稿7枚(200字原稿)	藝術と全体主義	1940(S15)/9/7	1	北尾淳一郎		
106	Noなし	芸術と全体主義	2	紀元二千六百年記念『美術創作』	藝術と全体主義	1940(S15)/10/15	2	北尾淳一郎/美術作家協會	口絵:北尾の寫眞『藝場』 他に記事:難波田龍起、山田光春 等 表紙:森芳雄 扉柱:長谷川三郎		
107	29~81	※表題なし		1	原稿24枚(200字原稿)	利休の精神	1941(S16)/3/3	1	北尾淳一郎	雑誌「美の國」と別綴表紙に赤で記載	
108	Noなし	利休の精神	1	原稿23枚(200字原稿)	致一利休の精神	1941(S16)/3/3	1	北尾淳一郎		三鷹	
			2	『美之國』5	利休の精神	1941(S16)/5/1	1	北尾淳一郎/美之國社			
109	29~81	※表題なし		1	『報知新聞』	蜚はどうして光るか(上)	1941(S16)/7/1	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
110	29~81	※表題なし		1	『報知新聞』	蜚はどうして光るか(下)	1941(S16)/7/3	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
111	Noなし	蜚はどうして光るか		1	原稿13枚(200字原稿)	蜚はどうして光るか		1	北尾淳一郎		
112	29~81	※表題なし		1	『報知新聞』	癩の話(上)	1941(S16)/8/23	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
113	29~81	※表題なし		1	『報知新聞』	癩と體質(下)	1941(S16)/8/24	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
114	Noなし	癩の話		1	原稿12枚(200字原稿)	癩の話	1941(S16)/8/16	1	北尾淳一郎		

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
第九関連以外のエッセイや評論等の資料										
115	29~81	※表題なし		『報知新聞』	實力の尊重	1941(S16)/9/12	1	北尾淳一郎/報知新聞社		
116	№なし	實力を尊重せよ		原稿3枚(200字原稿)	實力を尊重せよ	1941(S16)/8/18	1	北尾淳一郎		
117	29~81	※表題なし		原稿4枚(400字原稿)	捲ぐるま(隨筆集)		1	北尾淳一郎	別綴表紙に序及び目次と記載	
118	№なし	捲ぐるま(隨筆集)序と目次	1	原稿6枚(200字原稿)	捲ぐるま(隨筆集)	1943(S18)/9/24	1	北尾淳一郎	生活・自然・藝術(隨筆集)改めと記載有り	三鷹
			2	原稿4枚(400字原稿)	捲ぐるま(隨筆集)	1944(S19)/3/11	1	北尾淳一郎		三鷹
119	29~81	※表題なし		『新人文芸新聞』	専門家の隨落	1950(S25)/5/15	1	北尾淳一郎/新人文芸社		
120	№なし	専門家の隨落		原稿5枚(罫線ナシ用紙18.2×25.7)	専門家の隨落	1950(S25)/2/25	1	北尾淳一郎	例えば『専門の画家たち	
121	29~81	※表題なし		原稿6枚(400字原稿)	街のリズム、修身科の問題	1956(S31)/10/20	1	北尾淳一郎		三鷹
122	№なし	街のリズム、修身科の問題		原稿6枚(400字原稿)	街のリズム、修身科の問題	1956(S31)/10/20	1	北尾淳一郎		
123	29~81	※表題なし		『文芸手帖』11月 第一巻第四号	くろの死	1956(S31)/11/1	1	北尾淳一郎/文芸手帖の会		
124	№なし	黒の死		原稿18枚(400字原稿)	黒の死	1956(S31)/6/3	1	北尾淳一郎		三鷹
125	82~87	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	年の変わり目の感想	1936(S11)/1/3	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
126	№なし	年の変わり目の感想		原稿5枚(400字原稿)	年の変わり目の感想	1935(S10)/11/27	1	北尾淳一郎		
127	82~87	※表題なし	1	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(一)	1939(S14)/2/5	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			2	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(二)	1939(S14)/2/7	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			3	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(三)	1939(S14)/2/8	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			4	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(四)	1939(S14)/2/9	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			5	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(五)	1939(S14)/2/10	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			6	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(六)	1939(S14)/2/11	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			7	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(七)	1939(S14)/2/14	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			8	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(八)	1939(S14)/2/15	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			9	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(九)	1939(S14)/2/16	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
128	№なし	藝術寫眞の寫し方	1	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(一)	1939(S14)/2/5	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			2	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(二)	1939(S14)/2/7	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			3	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(三)	1939(S14)/2/8	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			4	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(四)	1939(S14)/2/9	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			5	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(五)	1939(S14)/2/10	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			6	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(六)	1939(S14)/2/11	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			7	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(七)	1939(S14)/2/14	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			8	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(八)	1939(S14)/2/15	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
			9	日刊『宮崎今日』	藝術寫眞の寫し方(九)	1939(S14)/2/16	1	北尾淳一郎/宮崎今日社		
129	82~87	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	展覧会ご審査(上)	1939(S14)/11/22	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	第二回昆虫展覧會～	
130	82~87	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	展覧会ご審査(下)	1939(S14)/11/23	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社	第二回昆虫展覧會～	
131	№なし	展覧会と審査		原稿11枚(200字原稿)	展覧会と審査	1939(S14)/11/17	1	北尾淳一郎	第二回昆虫展覧會～	宮崎
132	82~87	※表題なし		日刊『宮崎新聞』	或る修養会の信條試案	1940(S15)/1/1	1	北尾淳一郎/宮崎新聞社		
133	№なし	或る修養会の信條私案		原稿5枚(200字原稿)	或る修養会の信條試案	1939(S14)/12/16	1	北尾淳一郎		宮崎
134	82~87	※表題なし		日刊『日向日新聞』	中村地平氏の近著『長耳國漂流記』を讀む(上)	1941(S16)/8/3	1	北尾淳一郎/日向日新聞社	見出し美しき日向を憶ふ	
135	82~87	※表題なし		日刊『日向日新聞』	中村地平氏の近著『長耳國漂流記』を讀む(下)	1941(S16)/8/5	1	北尾淳一郎/日向日新聞社	見出し美しき日向を憶ふ	
136	№なし	『長耳國漂流記』を讀む	1	原稿17枚(400字原稿)	中村地平氏の近著『長耳國漂流記』を讀む	1941(S16)/7/27	1	北尾淳一郎	下書き	
			2	原稿20枚(400字原稿)	中村地平氏の近著『長耳國漂流記』を讀む	1941(S16)/7/27	1	北尾淳一郎	清書(日向日々新聞へ寄稿)と記載有り	
137	90	Vom japanischen Essen		A5サイズノート1冊	Vom japanischen Essen		1		全て独語『和食から』	
138	93	『武蔵野夫人』後日ばなし		原稿12枚(400字原稿)	『武蔵野夫人』後日ばなし	1956(S31)/9/25	1	北尾淳一郎	朱で記載(ハイクの武蔵野-武蔵野夫人の故地)	小金井
139	94	学生とエチケット		原稿6枚(400字原稿)	学生とエチケット	1950(S25)/10/26	1	北尾淳一郎		小金井
140	97~102	※表題なし		原稿12枚(200字原稿)	茶道と日常生活-生活文化の問題	1941(S16)/8/21	1	北尾淳一郎		三鷹
141	97~102	※表題なし		原稿12枚(200字原稿)	洋服の着方	1941(S16)/8/23	1	北尾淳一郎		三鷹
			№なし	洋服の着方	洋服の着方		1	北尾淳一郎	隨筆欄原稿と記載有り	
142	97~102	※表題なし		原稿11枚(200字原稿)	初夏と服装	1943(S18)/5/5	1	北尾淳一郎		
143	97~102	※表題なし		原稿13枚(200字原稿)	初夏と服装	1943(S18)/5/5	1	北尾淳一郎	大陸講談社、日本女性編輯部御中と記載有り	
144	97~102	※表題なし		原稿18枚(200字原稿)	科学と生活	1943(S18)/8/18	1	北尾淳一郎		
144	№なし	科学と生活		原稿15枚(200字原稿)	科学、と生活。	1943(S18)/8/14	1	北尾淳一郎		三鷹
145	103	デュルクハイム教授への書信		タイプライターによる書信5枚	Sehr geehrter und lieber Herr Professor!	1938(S13)/11/20	1	北尾淳一郎		
146	108	Geschichte von der Provinz Hyōga		大学ノート1冊			1		全て独語『WILLKOMMEN HITLER-JUGEND!』の下書き	
147	123	酒の話	1	原稿24枚(200字原稿)	酒の話	1939(S14)/12/18	1	北尾淳一郎		宮崎
			2	『20世紀』第3巻・第7號	酒の話	1941(S16)/7/25	1	北尾淳一郎/成美堂書店		
148	124	帽子と敬礼		原稿11枚(200字原稿)	帽子と敬礼	1941(S16)/8/24	1	北尾淳一郎		三鷹
149	125	武蔵野の半日		原稿10枚(400字原稿)	武蔵野の半日	1957(S32)/1/30	1	北尾淳一郎		
150	126	二学期制を三学期制に改正することを希望する理由		便箋5枚	二学期制ヲ三学期制ニ改正スルコトヲ希望スル理由		1	北尾淳一郎か	二学期制ヲ三学期制ニ改正スルコトヲ希望スル理由	
151	127	ヒットラ、ユウゲンツエの挨拶		タイプライタードイツ語文2枚	GRUSS AN DIE HITLER-JUGEND	1938(S13)/10/25	1	北尾淳一郎か		
152	128	“Westfront1918”を見る		原稿2枚(35.0×22.3)両面	Titania-Palastに“Westfront 1918”を見る。Tonfilmで、		1	北尾淳一郎か		
153	129	自然の心と云ふ事-自誠一束		原稿8枚(200字原稿)	自然の心と云ふ事-自誠一束	1942(S17)/10/4	1	北尾淳一郎		三鷹
154	131	ふるさと社同人十月作品小感		原稿3枚(400字原稿)	ふるさと社同人十月作品小感		1	北尾淳一郎	未完	
155	132	田園交響樂とオーケストラの少女		原稿9枚(400字原稿)	『田園交響樂』と『オーケストラの少女』	1938(S13)/9/28	1	北尾淳一郎		宮崎

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
環九関連以外のエッセイや評論等の資料										
156	133~136	新聞切抜「メロポリス」を見る他	1	『宮崎時事新聞』切抜	『メロポリス』を観る	1929(S4)/6/21	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
			2	『宮崎時事新聞』切抜	月曜映画『浮世小路』を観る	1929(S4)/8/12	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
			3	『宮崎時事新聞』切抜	公會堂建築論(上)	1929(S4)/8/23	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
			4	『宮崎時事新聞』切抜	公會堂建築論(中)	1929(S4)/8/24	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
			5	『宮崎時事新聞』切抜	公會堂建築論(下)	1929(S4)/8/25	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
			6	『宮崎時事新聞』切抜	『笑ふ男』小感	1929(S4)/9/30	1	北尾淳一郎/ 宮崎時事新聞社		
157	137	独乙人の日常生活とその国民性	原稿16枚(400字原稿)	他山の石—獨逸人の日常生活とその国民性(西洋風俗習慣叢話)	1937(S12)/3/27	1	北尾淳一郎		宮崎	
158	138	東西食物考	原稿5枚(400字原稿)	東西食物考		1	北尾淳一郎			
159	141	有用動物のはなし(家養動物雑話)	ノート用紙61枚(20.8×16.2)	有用動物のはなし(家養動物雑話)		1	北尾淳一郎か			
160	151	昆虫とは何か	原稿20枚(200字原稿)	昆虫とは何か	1941(S16)/10/22	1	北尾淳一郎		三鷹	
161	152	独乙の夏	原稿2枚(200字原稿)	獨逸の夏		1	北尾淳一郎	獨逸の夏		
162	153	平和に関する原稿	原稿3枚(B4罫線)	昭和廿五年六月七日午後、平和に関する講演原稿	1950(S25)/6/7	1	北尾淳一郎	日本人は天才を尊敬することをしらず〜最大の欠点		
163	157	教育疑獄と教育者の教育	原稿3枚(200字原稿)	教育疑獄と教育者の教育	1941(S16)/8/18	1	北尾淳一郎		三鷹	
164	158	センチメンタリズム	原稿2枚(200字原稿)	センチメンタリズム	1941(S16)/8/18	1	北尾淳一郎		三鷹	
165	160	子供に聞かせる生物の神秘	原稿27枚(200字原稿)	子供に聞かせる生物の神秘	1941(S16)/10/15	1	北尾淳一郎			
166	161	鬼の話	原稿5枚	鬼の話	1938(S13)/2/26	1	北尾淳一郎		宮崎	
167	163	結婚の動物学	原稿5枚(400字原稿4枚200字原稿1枚)両面	結婚の動物学	1949(S24)/1/11	1	北尾淳一郎			
168	164	昆虫の食物	原稿11枚(400字原稿)	昆虫の食物		1	北尾淳一郎			
169	165	芸術写真放談	原稿5枚(400字原稿)	芸術写真放談	1955(S30)/5/30	1	北尾淳一郎		三鷹	
170	166	虫害一般	原稿22枚(400字原稿)	農山村講座第五講 虫害一般	1937(S12)/12/25	1	北尾淳一郎	昭和十二年十二月二十九日 午後六時二十五分より三十分宮崎局に於て放送		
171	168	虎に似た動物	原稿5枚(400字原稿)	虎に似た動物	1937(S12)/12/28	1	北尾淳一郎		宮崎	
172	169	講演者の芸術経緯	原稿2枚(400字原稿)	講演者の藝術経緯		1	北尾淳一郎	北尾がまとめた自身の画歴		
173	170	現下の学徒に奨めたい趣味	『新若人十二月号(第一巻第四号)』のP117,118,123,124			1	北尾淳一郎/歐文社	全国複数校の教授のコメントを集めたもの		
174	175	昆虫のからだ(原稿)二部	1	原稿23枚(400字原稿)	昆虫のからだ		1	北尾淳一郎	下書き	
			2	原稿25枚(400字原稿)	昆虫のからだ		1	北尾淳一郎	清書	
175	176	街のリズム。交通道德の問題(原稿)六一年	原稿7枚(400字原稿)	街のリズム。交通道德の問題。	1961(S36)/1/30	1	北尾淳一郎		府中市 蛇内准 前で	
176	178	是政からの書信(原稿)三部 六一年	1	原稿9枚(罫線なし)		1961(S36)/9/2	1	北尾淳一郎		府中市 是政
			2	原稿11枚(400字原稿)		1961(S36)/9/2	1	北尾淳一郎		府中市 是政
			3	原稿11枚(400字原稿)		1961(S36)/9/2	1	北尾淳一郎	清書	
177	179	食事のエチケットと利休精神の再検討(原稿)六一年	原稿5枚(400字原稿) + 縦罫線1枚	食事のエチケットと利久的精神の再検討	1961(S36)/2/9	1	北尾淳一郎			
178	Noなし	昆虫展賞状授与式挨拶	原稿6枚(400字原稿)	宮崎新聞社主催第一回昆虫点覧会賞状授与式の挨拶	1938(S13)/11/16	1	北尾淳一郎		宮崎	
179	Noなし	第十二回青竜社展をみる	原稿7枚(200字原稿)	第十二回青龍社展を観る	1940(S15)/9/2	1	北尾淳一郎			
180	Noなし	地方文化の問題	1	原稿19枚(200字原稿)	地方文化の問題	1941(S16)/6/12	1	北尾淳一郎		
			2	原稿20枚(200字原稿)	地方文化の問題	1941(S16)/6/12	1	北尾淳一郎	清書 雑誌「アトリエ」と表紙に記載有り	
181	Noなし	日記帳から	原稿30枚	日記帳から		1	北尾淳一郎			
182	Noなし	茶道と日常生活—生活文化の問題	原稿11枚(200字原稿)	茶道と日常生活—生活文化の問題	1941(S16)/8/21	1	北尾淳一郎	文化欄原稿と記載有り	三鷹	
183	Noなし	或る日の感想	『新人文芸新聞』	或る日の感想	1950(S25)/3/15	1	北尾淳一郎/新人文藝社			
184	Noなし	國語、国字の問題—御挨拶に代えて(原稿)五八年	1	原稿2枚(400字原稿)	國語、國字の問題—御挨拶に代えて		1	北尾淳一郎	下書き	
			2	原稿7枚(400字原稿)	國語、國字の問題—御挨拶に代えて	1958(S32)/3/9	1	北尾淳一郎	清書	三鷹
185	Noなし	狐の話	原稿6枚(23×23字)	狐の話		1	北尾淳一郎	およそ野生の動物の中で〜		
研究及び学校(宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校、東京農工大学)関連の資料										
186	1~28	※表題なし		『古都、宮崎の景色を採ねる』	古都、宮崎の景色を採ねる	1930(S5)/11	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	文末に19304.9と記載有り	
187	Noなし	古都宮崎の景色を採ねる		『古都、宮崎の景色を採ねる』	古都、宮崎の景色を採ねる	1930(S5)/11	2	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	文末に19304.9と記載有り	
188	1~28	※表題なし		『宮崎市を中心とする名勝地遊覧』 學報第二十四號別刷	宮崎市を中心とする名勝地の遊覧	1937(S12)/8/20	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
189	Noなし	宮崎市を中心とする名勝地遊覧	1	原稿10枚(400字原稿)	宮崎市を中心とする名勝地の遊覧	1936(S11)/3/11	1	北尾淳一郎		
			2	『宮崎市を中心とする名勝地遊覧』 學報第二十四號別刷	宮崎市を中心とする名勝地の遊覧	1937(S12)/8/20	2	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
190	1~28	※表題なし		『西ヶ原同窓會報』第七卷・第五號	日本諸學振興委員會第一回自然科学會感想	1943(S18)/5/25	1	北尾淳一郎/ 東京高等蠶絲學校内 西ヶ原同窓會		
191	Noなし	日本諸學振興委員會第一回自然科学會感想	1	原稿23枚(200字原稿)	日本諸學振興委員會第一回自然科学會感想	1942(S17)/4/11	1	北尾淳一郎		
			2	『西ヶ原同窓會報』第七卷・第五號	日本諸學振興委員會第一回自然科学會感想	1943(S18)/5/25	1	北尾淳一郎/ 東京高等蠶絲學校内 西ヶ原同窓會		三鷹
192	1~28	※表題なし		『さゝなみ』創刊號	本物の弁	1946(S21)/11/25	1	北尾淳一郎/ 東京繊維専門学校 文化同好會文藝部	ガリ版 製本	
193	Noなし	本物の弁—巻頭の辞に代える	1	原稿5枚(400字原稿)	本物の弁—巻頭の辞に代へる	1946(S21)/11/10	1	下書き 北尾淳一郎		三鷹
			2	原稿5枚(400字原稿)	本物の弁—巻頭の辞に代へる	1946(S21)/11/10	1	清書 北尾淳一郎		
194	1~28	※表題なし		ガリ版冊子『若人』みのり号	若人に望む		1	北尾淳一郎/ 東京農工大学繊維学部 青年婦人部	文末1953.7.30小金井と記載	
195	Noなし	若人に望む	原稿4枚(400字原稿)	若人に望む	1953(S28)/7/29	1	北尾淳一郎		小金井	

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
研究及び学校(宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校、東京農工大学)関連の資料										
196	1~28	※表題なし		『西ヶ原同窓会報』第7号	思い出ばなし	1956(S31)/3/20	1	北尾淳一郎/ 東京農工大学繊維学部内西ヶ原同窓会		
197	Noなし	思い出ばなし	1	原稿4枚	思い出ばなし	1956(S31)/2/5	1	北尾淳一郎		三鷹
198	1~28	※表題なし		『駒場通信』	保守精神と進歩精神	1957(S32)/1/1	1	北尾淳一郎/駒場交友会	東京農工大同窓生会	
199	Noなし	保守精神と進歩精神	1	原稿6枚(400字原稿)	保守精神と進歩精神	1956(S31)/12/6	1	北尾淳一郎		小金井
200	29~81	※表題なし		原稿23枚(400字原稿)	處世哲学	1929(S4)/12/19	1	北尾淳一郎		
201	120	「ラモオナ」その他	1	原稿半紙	観音様-處世哲学 49頁17行		1	北尾淳一郎	二重消線 校正の指示か	
202		※封筒なし	2	『GAKUHOO學報』第九號 昭和五年一月三十一日	『ラオモナ』其他 観音様	1930(SS)/3/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
203	29~81	※表題なし		『日向の史蹟』 宮崎高等農学校開校十周年記念 「日向の自然と生物」別刷	日向の史蹟	1935(S10)/10/20	2	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	うち1冊は表紙に謹呈田村恒子様と記載 北尾の写真挿画5枚(延岡驛所見(延岡))、《水渡(高千穂峡)》、《日は入る山路(椎葉)》、《海濱(一つ瀬河の附近)》、《夕景(大淀川下流)》 文末に1935.7.2と記載有り	
204	Noなし	日向の史蹟		『日向の史蹟』 宮崎高等農学校開校十周年記念 「日向の自然と生物」別刷	日向の史蹟	1935(S10)/10/20	3	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	北尾の写真挿画5枚(延岡驛所見(延岡))、《水渡(高千穂峡)》、《日は入る山路(椎葉)》、《海濱(一つ瀬河の附近)》、《夕景(大淀川下流)》 文末に1935.7.2と記載有り	
205	29~81	※表題なし		學報第十九號別刷 『第九回美術展覧會の評』	第九回美術展覧會の評	1935(S10)/3/5	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
206	Noなし	第九回美術展覧會の評		學報第十九號別刷 『第九回美術展覧會の評』	第九回美術展覧會の評	1935(S10)/3/5	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
207	29~81	※表題なし		學報第二十一號別刷 開校十周年記念 『壇古座談會』	壇古座談會	1936(S11)/3/15	1	宮崎高等農林学校校友会	二月一日(土)午後七時半より (座長)北尾	
208	Noなし	壇古座談會		學報第二十一號別刷 開校十周年記念 『壇古座談會』	壇古座談會	1936(S11)/3/15	1	宮崎高等農林学校校友会	二月一日(土)午後七時半より (座長)北尾	
209	29~81	※表題なし		学術原稿6枚(400字原稿)	動物学答案講評		1	北尾淳一郎		
210	Noなし	動物学答案講評		学術原稿6枚(400字原稿)	動物学	1937(S12)/5/7	1	北尾淳一郎		
211	29~81	※表題なし		『宮崎高農第四回春季美術展』 學報第二十四號別刷	宮崎高農第四回春季美術展	1937(S12)/8/20	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	文末1937.7.27	
212	Noなし	宮崎高農四回春季美術展	1	原稿9枚(400字原稿)	高農四回春季美術展	1937(S12)/6/27	1	北尾淳一郎		
213	29~81	※表題なし		『三回宮崎寫真同好會展』 學報第二十四號別刷	三回宮崎寫真同好會展	1937(S12)/8/20	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	文末1937.7.1	
214	Noなし	三回宮崎寫真同好會展	1	原稿9枚(400字原稿)	三回宮崎寫真同好會展	1937(S12)/7/1	1	北尾淳一郎		
215	29~81	※表題なし		『本校の草創時代を偲ぶ座談會』 學報第二十五號別刷	本校の草創時代を偲ぶ座談會	1938(S13)/3/15	1	宮崎高等農林学校校友会	昭和十二年十一月十七日午後七時より十時まで 座長(北尾)	
216	Noなし	本校の草創時代を偲ぶ座談會		『本校の草創時代を偲ぶ座談會』 學報第二十五號別刷	本校の草創時代を偲ぶ座談會	1938(S13)/3/15	1	宮崎高等農林学校校友会	昭和十二年十一月十七日午後七時より十時まで 座長(北尾)	
217	29~81	※表題なし		『西ヶ原同窓会報』第五卷第七號	酒	1941(S16)/7/25	1	北尾淳一郎/ 東京高等蠶糸学校内西ヶ原同窓会		
218	Noなし	酒		原稿16枚(200字原稿)	酒	1941(S16)/7/5	1	北尾淳一郎		
219	29~81	※表題なし		西ヶ原同窓会報 第2号	街のリズム一歳の始めの不幸な出来事に関連して	1954(S29)/1/30	1	北尾淳一郎/ 東京農工大学繊維学部内西ヶ原同窓会	表紙に謹呈 田村恒子様 と記載	
220	154	街のリズム一歳の始めの不幸な出来事に関連して		原稿6枚(400字原稿)	街のリズム一歳の始めの不幸な出来事に関連して	1954(S29)/1/5	1	北尾淳一郎		三鷹
221	29~81	※表題なし		月刊『東京農工大学学生新聞』	職業に徹して社会に盡せ	1957(S32)/4/17	2	北尾淳一郎/ 農工大学新聞会		
222	Noなし	重複		月刊『東京農工大学学生新聞』	職業に徹して社会に盡せ	1957(S32)/4/17	2	北尾淳一郎/ 農工大学新聞会		
223	29~81	※表題なし		ガリ版7枚(24.4×33.5)	創立十周年記念式典を迎へる宮崎高等農林学校		1	北尾淳一郎か		
224	Noなし	創立十周年記念式典を迎へる宮崎高等農林学校	1	原稿7枚(400字原稿)	創立十周年記念式典を迎へる宮崎高等農林学校		1	北尾淳一郎か		
225	29~81	※表題なし		ガリ版5枚(24.4×33.4)			1	北尾淳一郎	私は当校第一回入学試験に於いて～	
226	Noなし	第一回入学試験の感想		ガリ版5枚(24.4×33.4)			3	北尾淳一郎	私は当校第一回入学試験に於いて～	
227	88~89	※表題なし		原稿59枚(400字原稿)	琉球行	1929(S4)/7/9	1	北尾淳一郎		
228	Noなし	琉球行	1	原稿117枚(200字原稿)	琉球行		1	北尾淳一郎		
229		※封筒なし	2	『琉球行』宮崎高等農林学校校友会雑誌學報第八號別刷	琉球行	1929(S4)/9	3	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	内1部は赤による校正有り、他1部に松原、日野含む29名の名前のメモが挟まっている 文末1929年7月9日	
230	92	綜合養蚕学の発刊に寄せる		原稿3枚(400字原稿)	綜合養蚕学の発刊に寄せる	1953(S28)/7/3	1	北尾淳一郎	文末1929.7.9	小金井
231	95	みやこの会々報第三号 兄の書信		原稿5枚(400字原稿)		1953(S28)/8/28	1	北尾淳一郎	みやこの会各位様宛	三鷹
232	96	東京農工大学新聞の発刊に寄せる		原稿2枚(400字原稿)	東京農工大学新聞の発刊に寄せる	1954(S29)/9/21	1	北尾淳一郎	東京農工大学新聞の発刊に寄せる	
233	97~102	※表題なし		『成練と生學』第一卷第四號(四月號)	草と昆虫	1942(S17)/4/1	1	北尾淳一郎/ 城北通信指導學會		
234	Noなし	草と昆虫		原稿31枚(200字原稿)	草と昆虫	1942(S17)/3/3	1	北尾淳一郎		
235	97~102	※表題なし		原稿3枚(400字原稿)	新入生諸君に	1957(S32)/4/10	1	北尾淳一郎	下書き	
236	97~102	※表題なし		原稿4枚(400字原稿)	新入生諸君に	1957(S32)/4/17	1	北尾淳一郎	清書	

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地
研究及び学校(宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校、東京農工大学)関連の資料										
237	104	一般生物学、		原稿18枚(ノート35頁)(21.1×15.2)	生物 一般生物学(allyemeine Biologie)		1			
238	105	各論生物学		原稿20枚(ノート39頁)(21.1×15.2)	各論生物学 spezielle Biologie		1			
239	106	Aus dem Tagebuch		横罫線ノート7枚(1冊)	Aus dem Tagebuch		1		全て独語「麻酔について」	
240	110~114	生命の起源その他		『GAKHOO学報』第八号 昭和四年九月三十日	生命の起源 楽劇の本質 姫原郷 メトロポリスを見る まんさく 雑句	1928(S3)/10/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	Z.K.名(北尾イニシャル)	
241		※封筒なし		『GAKHOO学報』第八号 昭和四年九月三十日	生命の起源 楽劇の本質 姫原郷 メトロポリスを見る まんさく 雑句	1928(S3)/10/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	(表紙に雑句、まんさく、メトロポリスをみる、楽劇の本質、生命の起源と鉛筆による記載有) Z.K.名(北尾イニシャル) Z.K.名(北尾イニシャル) Z.K.名(北尾イニシャル)	
242	115~116	昆虫の護身法について一緒論 他一篇		『学報』第一卷第三号 昭和二年三月一日	昆虫の護身法について一緒論 精神の基本的實在性による三つの類型に就て	1927(S2)/5/5	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
243		※封筒なし		『学報』第一卷第三号 昭和二年三月一日	昆虫の護身法について一緒論 精神の基本的實在性による三つの類型に就て	1927(S2)/5/5	2	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	(1部は表紙に 昆虫の護身法について(緒論)と鉛筆による記載有、1部は表紙に精神の、その本質的實在性による三つの類型についてと鉛筆による記載有)	
244	117~119	昆虫の護身法について一本論 他二篇		雑誌『学報』特輯号 開校記念号	動物の体温について 昆虫の護身法について一本論 昆虫の護身法について一餘論	1928(S3)/9/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	中目次 校友会雑誌学報開校式記念特輯号	
245		※封筒なし		雑誌『学報』特輯号 開校記念号	動物の体温について 昆虫の護身法について一本論 昆虫の護身法について一餘論	1928(S3)/9/10	2	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	(1部は表紙に 昆虫の護身法について(本論)(余論)の記載有、1部は表紙に「動物の体温」についての記載有)	
246	121~122	雑詠その他		『学報』第七号	蛇の話 雑詠	1929(S4)/3/31	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	Z.K.名(北尾イニシャル)	
247	Noなし	重複		『学報』第七号	蛇の話 雑詠	1929(S4)/3/31	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会		
248	140	第一回寫真展ラン会感想		『学報』GAKUHŌ DAI 18 GŌ	日本の風景の特色 第一回寫真展覽會感想	1934(S9)/7/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	第一回寫真展覽會感想と鉛筆で表に記載	
249		※封筒なし		『学報』GAKUHŌ DAI 18 GŌ	日本の風景の特色 第一回寫真展覽會感想	1934(S9)/7/10	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	(表紙に 第一回寫真展覽會感想と鉛筆による記載有)	
250	142	授精、卵割、胚葉形成		1 学術原稿17枚(200字原稿)	授精		1		養蚕三年	
250	143			2 学術原稿10枚(200字原稿)	卵割		1		養蚕三年第二学年第二学期講義始と記載有	
250	144			3 学術原稿55枚(200字原稿)	胚葉形成 Bildung der Keimblätter		1		養蚕三年第三学年講義始と記載有	
251		※封筒なし		ガリ版5枚	養蚕三年 授精		1	北尾淳一郎か	※講義資料	
252				ガリ版3枚	養蚕三年 卵割		1	北尾淳一郎か	※講義資料	
253				ガリ版12枚	養蚕三年 胚葉形成		1	北尾淳一郎か	※講義資料	
254	149	メンデルソーンのアインシュタインツルム		『学報』創刊號第一卷第一號	メンデルソーンのアインシュタインツルム(紹介)	1926(S元)/7/1	1	北尾淳一郎/ 宮崎高等農林学校校友会	付録図版1枚北尾か?	
255	156	入学試験の感想		原稿7枚(400字原稿)	入学試験の感想	1938(S13)/4/8	1	北尾淳一郎		宮崎
256	162	科学論文、性の生物学目次と附図		表:目次9枚綴(含白紙3枚)39.4×27.2	科学隨筆、性の生物学		1	北尾淳一郎か	科学隨筆、性の生物学目次と付図目録	
256	162			裏:ガリ版4枚+ガリ版3枚(付白紙2枚)	宮崎高農四回春期美術展	1937(S12)/6/27	2	北尾淳一郎	1部は1枚欠 白紙も付いているので裏紙として再利用か	
256	162			表:目次5枚綴(含白紙2枚)39.4×27.2			1	北尾淳一郎か	下書き赤字校正多数	
256	162			裏:ガリ版4枚(付1枚白紙)	宮崎高農四回春期美術展	1937(S12)/6/27	1	北尾淳一郎		
256	162			3 附図A4(3枚)			1	北尾淳一郎か		
256	162			4 付図A5(25枚)内2枚白紙			1	北尾淳一郎か		
257	167	宮崎高等農林学校開校十周年記念行事一般		原稿6枚(23×23字)	行事一般		1	北尾淳一郎	式次第等と記録(S11.1.4開催の式)	
258	174	移轉当時のことなど(原稿)六二年		原稿8枚(400字原稿)	移轉当時のことなど	1962(S37)/3/12	1	北尾淳一郎		府中是政の寓居で
259	177	害虫の防除		ガリ版6枚 (25.8×36.4)5枚+(25.8×18.2)1枚	害虫の防除		1	北尾淳一郎	昭和十六年度夏休前講義終と鉛筆メモあり	
260	Noなし	害虫の防除		ガリ版6枚 (25.8×36.4)5枚+(25.8×18.2)1枚	害虫の防除		2	北尾淳一郎		
261	Noなし	昭和十三年度動物学答案講評		原稿5枚(400字原稿)+問題用紙1枚	昭和十三年度宮崎高等農林学校入学試験動物学答案講評+動物学	1938(S13)/4/25	1	北尾淳一郎		

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類/掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者/発行	特記事項	執筆地	
研究及び学校(宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校、東京農工大学)関連の資料											
262	No.なし	研究資料	1	カリ版 学術文4枚 (18.9×41.5)1枚(18.9×40.0)3枚	蓖麻蚕(惠利蚕)飼育要綱	1943(S18)/10/26	1				
			2	学術原稿(縦罫線)5枚 東京高等蠶絲学校用紙(25.8×18.2)	研究成果要旨 纖維作物ノ害虫防除ニ関スル研究 一、栃木縣下ニ於ケル麻象虫ノ生態ニ就テ	1945(S20)/1/8	1	北尾淳一郎 神岡四郎			
			3	学術原稿(横罫線4枚)	Zuzüglich des haematopietischen Gewebes~		1			便せん内 独語原稿2とともに含 補足~	
			4	学術原稿(横罫線2枚)	Zusammenfassung.		1			便せん内 独語原稿1とともに含 概要	
			5	学術原稿27枚(400字原稿)	桑樹主要有害動物の生態と防除		1	北尾淳一郎			
			6	学術原稿(縦罫線)5枚 東京高等蠶絲学校用紙(25.8×18.2)	栃木縣下に於ける麻象虫の生態に就て(未完)		1	神岡四郎			
			7	学術原稿(縦罫線)2枚 東京高等蠶絲学校用紙(25.8×18.2)	纖維作物ノ害虫防除ニ関スル研究 麻象虫ノ棉ノ粟野螟蛾ノ他ニ対スル抵抗性品種ノ選出		1	畑村又好			
			8	学術原稿(縦罫線)5枚 東京高等蠶絲学校用紙(25.8×18.2)	○研究成果要旨 題目、纖維作物の害虫防除ニ関する研究		1	研究員代表 北尾淳一郎			
			9	学術原稿2枚(縦罫線) 東京高等蠶絲学校用紙(25.8×18.0)			1			成虫は先づ四月の下旬から5月へで始まる文	
			10	学術原稿1枚(縦罫線)(25.8×18.2)	動物性纖維(七四号丙) 蓖麻蚕、シンジュ蚕 東京纖維専門学校		1	北尾淳一郎		研究項目	
			11	学術原稿1枚(縦罫線)(25.7×36.5)	◎エリ蚕の越冬に関する研究(向山助教)		1			赤で重要と記載	
			12	学術原稿1枚(縦罫線)(25.8×18.0)	農作害虫班協議事項(十九年六月十四日)		1				
			13	学術原稿1枚(縦罫線)(25.8×18.2)			1				一、麻象虫、麻線蟲、粟野螟蛾による被害の大塚に於ける~
			14	学術原稿2枚(罫線)(35.0×24.8)			1			内容: Kopf 頭部~ 封筒入(表記A3 小林君~)	
			15	東京高等蠶絲学校入学試験答案用紙1枚(20.8×29.9)			1			内容: 1. 麻及~以上戸倉	
263	No.なし	※表題なし	1	タイプライターによる文50枚	Betäubende Mittel (Meyer s Konversations-Lexikon, Sechste Auflage.) 1~50		1		全てドイツ語 麻酔薬(マイヤー百科事典第6版)		
			2	タイプライターによる文28枚	Anästhesie (Der Grosse Brockhaus)-1~28		1		全てドイツ語 麻酔薬(ブロックハウス百科事典)		
264	No.なし	※表題なし	1	タイプライターによる文14枚			1		全てドイツ語 各ページ左上に Genusmittel-数字の記載有(93枚)		
			2	タイプライターによる文4枚	GENUSSMITTEL.		1				
			3	タイプライターによる文75枚	GENUSSMITTEL. I. Allgemeines.		1				
265		※封筒なし	ノート用紙6枚12頁	生機学談話会講演 蚕繭の利用 小柳達男 植物及動物第9巻第9-10号(昭和十六年九月十月)	1941(S16)/9-10	1					
266		※封筒なし	原稿6枚(400字原稿)	蓖麻蚕(惠利蚕)飼育要綱~6枚	1943(S18)/10/26	1					
267	※封筒なし	北尾氏宛書留封筒入り 府下三鷹村上連雀八三九 北尾淳一郎先生 書留 城北通信指導學會	1	図(19.3×13.8)	第一圖(全六図)ハムグリカ幼虫(エカキ)被害葉		1	北尾淳一郎	市外、三鷹町上連雀八三九と記載有り(北尾の住所)	三鷹	
			2	図(19.3×13.8)	第二圖(全六図)キクムシ一種の坑道		1	北尾淳一郎			
			3	図(19.0×14.0)	第三圖(全六図)虫糞断面		1	北尾淳一郎			
			4	図(19.3×13.8)	第四圖(全六図)ヌルデの"ふし"		1	北尾淳一郎			
			5	図(19.0×13.8)	第五圖(全六図)アリノソキ		1	北尾淳一郎			
			6	図(19.3×13.8)	第六圖(全六図)セミタケ		1	北尾淳一郎			
268		※封筒なし	※メモ			1		昆虫 應用昆虫 等と記載			
269		※封筒なし	※蚕の羽のスケッチ(20.4×13.3mm)	Berge: Schmetterlingsf. rch. S. 133.		1					
270		※封筒なし	※スケッチ(13.8×19.3)			1		顕微鏡で拡大した図			
271		※封筒なし	※スケッチ(13.7×19.3mm)	食片ノ形状(立寄棒蚕、食片13倍=拡大)		1					
272		※封筒なし	※蚕のスケッチ(14.3×19.3mm)	攝食、姿勢		1		幼虫を書いた図			
273		※封筒なし	※蚕のスケッチ(13.8×19.3)			1		さなぎを書いた図			
274		※封筒なし	ノート用紙1枚2頁	散卵胚子の簡易検出法 大場治男(長野縣蚕業試験場)植物及動物10巻7号687頁		1		メモ			
275		※封筒なし	縦罫線用紙2枚	蓖麻栽培ニ関スル件(回答案)		1					
276		※封筒なし	縦罫線用紙5枚	蓖麻蚕(惠利蚕)飼育要綱		1					
277		※封筒なし	ノート用紙1枚1頁	Samia Cynthia Pryeri (Butler) 蓩蚕、シンジュサン(天蚕蛾科)		1		※メモ			
278		※封筒なし	ノート用紙1枚3行	桑葉食害鱗翅類		1		※メモ			
279		※封筒なし	原稿用紙7枚(34×14字)	①幼虫乾燥標本の製法 西垣融夫 植物及動物11(3):257~258②越冬後所謂最長期に至る胚子の形態的呼称に就て 大場治男 植物及動物11(3):262~263③家蚕卵發育に従ふ卵内溶液水分量の著変 黒田嘉一郎・李基寧 植物及動物11(6):467~470		1		各論についての考察			
280		※封筒なし	原稿用紙2枚(34×14字)	天蚕蛾科二種の染色体. 大場治男 植物及動物10(5):492~493. 若若並に着生部位を異にせる蓖麻蚕の蚕兒に及ぼす影響に就いて. 川口榮作・佐藤林二郎 植物及動物10(6):521~526		1		各論についての考察			
281		※封筒なし	原稿用紙3枚(34×14字)	家蚕に於ける孵化の早晚と雌雄との関係. 室賀兵左衛門 応用動物学雑誌13(1):39~48. 家蚕の雄性生殖細胞の根柢状態に就いて. 利岡静一 植物及動物9(4):601~602. 多角体病蚕の体液のカタラゼ作用. 石森直人、岩崎富夫 植物及動物9(5):719~721. 無脊椎動物のホルモン論[11]~[13]梅谷与七郎 植物及動物9(4)~(6)、		1		各論についての考察			
282		※封筒なし	原稿用紙3枚(34×14字)	①テグスの研究[1]小泉清明・柴田喜久雄 植物及動物10(11):1011~1016. クリケムシの中部繭腺に於ける絹質物生成の特異性に就いて. 大場治男 植物及動物10(12):1089~1096テグスの研究[2]小泉清明・柴田喜久雄 植物及動物10(12):1109~1115		1		各論についての考察			
283		※封筒なし	ノート用紙4枚 7頁	テグスの研究[1][2]小泉清明・柴田喜久雄		1	小泉清明・柴田喜久雄	他者 原稿			
284		※封筒なし	ノート用紙1枚2頁	蚕の化性 昆虫と植物の関係		1					
285		※封筒なし	ノート用紙1枚2頁	絹絲虫の分類(眞綿てぐさ→糸→織物)		1					
286		※封筒なし	ノート用紙10枚	桑樹主要有害動物の越冬状態並びにその冬期防除に関する調査		1					

No.	封筒No.	封筒表題	内訳	種類／掲載物(用紙種類・サイズ(cm))	表題	日付	数	執筆者／発行	特記事項	執筆地
研究及び学校(宮崎高等農林学校、東京高等蚕糸学校、東京農工大学)関連の資料										
287		※封筒なし		学生のレポート7枚	九月中旬 十月上旬 十月下旬に於ける紋白蝶の差異 養蚕学科第二学年生 山崎重信		1	山崎重信	他者 原稿	
288		※封筒なし		学生のレポート20枚	害虫/防除法 栽桑科三学年生 佐藤正次		1	佐藤正次	他者 原稿	
289		※封筒なし		試験問題	樟蚕 <i>Dictyoploca Japonica</i> Moore 飼育試験		1	不明		
北尾の私信やその他の資料										
290	29～81			ガリ版3枚			1	北尾淳一郎	病氣回復の札状	
291	Noなし	病氣見舞金札状		ガリ版3枚		1905(M38)/5/6	3	北尾淳一郎	病氣回復の札状	
292	29～81			原稿2枚(401字原稿)		1957(S32)/4/8	1	北尾淳一郎	下書き	
293	Noなし	故吉田諒藏氏への弔辞		原稿2枚(400字原稿)		1957(S32)/4/8	1	北尾淳一郎	清書	
294	130	昭和四年当用日記		1綴り(21.8×15.0)128ページ	昭和四年当用日記		1	北尾淳一郎	明治元年4月21日～7月21日の部分のみ	
					公会堂建築論	1929/6/28	1	北尾淳一郎	下書き 日付は二重消線で削	
					『ラモオナ』其他。	1929/12/1	1	北尾淳一郎	下書き	
					観音様		1	北尾淳一郎	下書き	
295	133～136			新聞切抜(新聞名不明)	蓋を明けた寫真繪畫展	不明	1	南村醇吉/不明	北尾作品「道」(特選)への論評	



1 原稿10枚(400字原稿)  
或る日曜日



2 原稿3枚(200字原稿)



3-1 原稿15枚(200字原稿)  
或る日曜日



3-2 原稿2枚(200字原稿)



3-3 原稿10枚(400字原稿)  
或る日曜日



4 日刊『宮崎新聞』  
ふるさと舍同人展(上)



5 日刊『宮崎新聞』  
ふるさと舍同人展(下)



6 原稿8枚(400字原稿)  
ふるさと会二回展感想



7 日刊『宮崎新聞』  
第二回宮崎美術協會展(上)



8 日刊『宮崎新聞』  
第二回宮崎美術協會展(中)



9 日刊『宮崎新聞』  
第二回宮崎美術協會展(下)



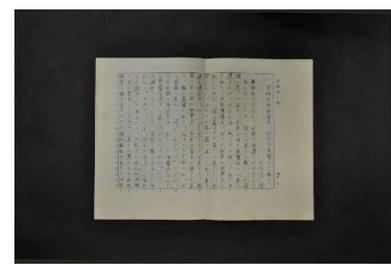
10 原稿12枚(400字原稿)  
第二回宮崎美術協會展



11 原稿4枚(400字原稿)  
下町の記憶



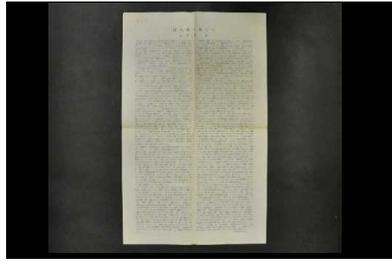
12 原稿14枚(400字原稿)  
H町の印象



13-1 原稿8枚(400字原稿)  
宮崎美術協會第一回作品展覽会を観る



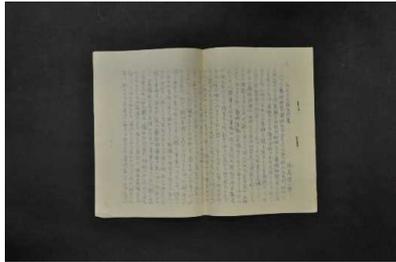
13-2 夕刊『宮崎新聞』  
宮崎美術協會第一回作品展覽會感想



14 印刷物(46.3×28.8)  
瑛九氏の事ども



15-1 原稿12枚(400字原稿)  
ふるさと社五回展



15-2 ガリ版9枚(白表紙1枚含)  
ふるさと社五回展



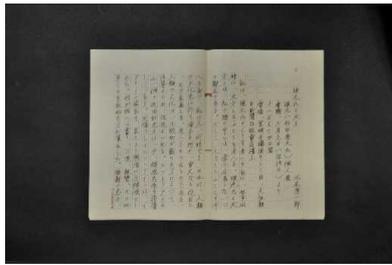
15-3 日刊『宮崎新聞』  
ふるさと社五回展



15-4 日刊『宮崎新聞』  
ふるさと社五回展(二)



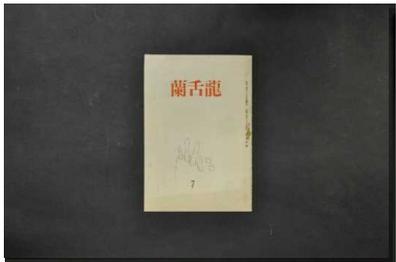
15-5 日刊『宮崎新聞』  
ふるさと社五回展(三)



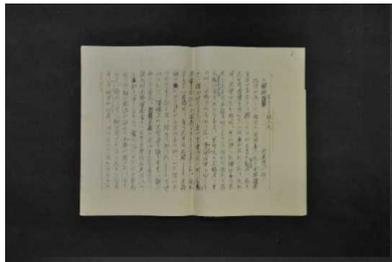
16-1 原稿4枚(400字原稿)  
瑛九氏と天才



16-2 日刊『宮崎今日』  
瑛九氏と天才



17 『龍舌蘭7』  
一ッ葉濱



18-1 原稿9枚(400字原稿)  
藝術家としての瑛九氏



18-2 『藝術家 瑛九』  
藝術家としての瑛九



19 原稿5枚(400字原稿)  
聖都宮崎市に於ける藝術運動の概観

北尾淳一郎

「宮崎美術協會第一回作品展覧会を觀る」(原稿)

「宮崎美術協會第一回作品展覧會感想」『宮崎新聞』1939年12月10日

翻刻の基準は以下のとおり

1. 旧漢字・異体字はなるべく原文のままとした。
2. 仮名遣いは旧仮名遣いそのままとした。
3. 略字、明らかな誤字は改めたが、文意が通じるものは原文のまま表記した。
4. 句読点は、原文にある場合のみ記載した。
5. 判読不明な文字については□で表記した。

宮崎美術協會第一回作品展覧会を観る

北尾淳一郎

藝術家の天才と、世間の評價とが必ずしも  
 一致しないことを、我々は常に目撃し、又遺  
 憾に思つて居る。中央の何々展覧会に一度入  
 選すれば、その人は、例へその後、十年一日  
 の如く、旧套陳腐な、我々に何等の感興をも  
 起さしめない様な畫ばかり畫いて居ても、世  
 間では、一ぱしの大家の様に考へられて居る  
 様な場合、いくらもあることであらう。我  
 國では一体に物事が、中央に集まり過ぎて居  
 る。殊に畫壇に於て。私はこの方面には、全  
 く素人の素人で、何にもわからないのだが、  
 元來我國の洋画界は、主として佛蘭西あたり  
 の影響を受けて居るのであらうから、こうし  
 た傾向になることも、自然の勢であるかも知  
 れない。それにしても、田舎があまりに閑却  
 され過ぎては居ないか。大都會の殺人的喧騒  
 の中に青白くうごめいて居る人間たちの病的  
 情景を描き出すのが尖端的藝術であると同時

No.17-1

北尾淳一郎

宮崎美術協會第一回作品展覧会を観る（原稿）

宮崎美術協會第一回作品展覧会を観る

北尾淳一郎

藝術家の天才と、世間の評價とが必ずしも  
 一致しないことを、我々は常に目撃し、又遺  
 憾に思つて居る。中央の何々展覧会に一度入  
 選すれば、その人は、例へその後、十年一日  
 の如く、旧套陳腐な、我々に何等の感興をも  
 起さしめない様な畫ばかり畫いて居ても、世  
 間では、一ぱしの大家の様に考へられて居る  
 様な場合、いくらもあることであらう。我  
 國では一体に物事が、中央に集まり過ぎて居  
 る。殊に畫壇に於て。私はこの方面には、全  
 くの素人で、何にもわからないのだが、  
 元來我國の洋画界は、主として佛蘭西あたり  
 の影響を受けて居るのであらうから、こうし  
 た傾向になることも、自然の勢であるかも知  
 れない。それにしても、田舎があまりに閑却  
 され過ぎては居ないか。大都會の殺人的喧騒  
 の中に青白くうごめいて居る人間たちの病的  
 情景を描き出すのが尖端的藝術であると同時

に、大地に根を下ろした様な田園の生活や、  
 又搖籃の如く我々の心を包む、大きな、静か  
 な、神秘的な田舎の景色を寫すことも又、藝術  
 の一つの大きな、本質的な分野でなければな  
 らない。人材の中央集中がよし一般の傾向で  
 あるとしても、我が宮崎には、世間の評價や  
 浮き世的地位などを絶した、隠れたる天才乃  
 至はその芽生えの幾つかが必ずひそんで居ることを私  
 は確信する。神武大帝の旧國、皇祖發祥の靈地  
 たる我が宮崎は、唯にその厂史の悠久を誇る  
 のみならず、又實に海内無比の風景的環境を以て  
 恵まれて居る。この環境に、もしも天才が  
 出ないとするれば、居ないとすれば、これほど大  
 きな矛盾はない。今これらの人々が、折りに  
 觸れ、時に取つての感興は、必ず現はれて、  
 優秀なる多くの作品を産み出すに至るであらう。  
 私は、宮崎美術協会の生誕を、心から祝福す  
 るものの一人である。  
 第一回作品展覧会は、出品の相当多い  
 にかかはらず、稍々さびしい感じがしないで

もない。この數年来——と云つても彼れこれ  
 十年近くも畫壇の作品殊に我國のそれから遠  
 ざかつて居る私としては、皆目様子がわから  
 ないから、批評などは、以つての他だが、頼  
 めれるままに、感じた事二三を書き連ねて、  
 素人評を試みることにする。

川村伊作氏の『椿』は、落ち付いた、澁い感じ  
 の、実に気持ちのよい作品であると  
 思つた。円熟せる技巧を思はしめ  
 る。南郷梓氏の『秋日の校庭』には素晴らし  
 い色が出て居るが、惜しいことに構圖が悪  
 い。同氏の『床の前にて』などの行き方から  
 見ると、余程しつかりした腕の持ち主の様  
 思はれる。壹岐茂氏の行き方も、  
 悪氣がなくて面白い。この上今少しの工夫が  
 あつたらどうかと思ふ。少女像、甲子晴着など  
 悪くはないが何となく物足りない。西澤芳郎氏の風景もすつきりし  
 たよい感じである。こうした筆法は、どうせ佛蘭西  
 あたりで何とか六ヶ敷い名前のついた流儀に属するの

佛蘭西

であらうが、そんなことは知らない。向つて右  
 の方の『秋景』の方がよい様に思ふ。『櫛』で  
 は、あまり影がどぎつく出過ぎては居ないか  
 。板本正直氏の焚火も寫實的なおとなしいよ  
 いであらう。杉田秀夫氏の習作A Bは、素晴  
 らしいものだ。油繪の方  
 ではまづ特選賞に價するものであらう。  
 水彩の方では、古川量明氏の『秋庭』と、甲斐  
 鉄夫氏の『花壇』とが断然光つて居る。私は、  
 展覧会のすべての作品を通じて、この二  
 点に最も感心したことを告白する。実に何と  
 も云へぬよい色である。一体に音楽と云  
 へば、管絃樂が代表的のもの様に思はれて  
 居るにかかはらず、實際は、ソロや、四重奏  
 あたりに、かへつて深い趣きがあると同様に  
 、絵画に於ても、油絵よりも、水彩や素描な  
 どの小品の方に、かへつて非常によい物を発  
 見する場合が稀でない。水彩画や鉛筆画など、も  
 つともつと開拓せられて然る可き畑ではなか



此に於て、非常にすぐれて居るにも不拘、内容的の深さに於て稍々欠けて居る處が無いでも無い様に、しばしば感ぜられることは、残念なことである。寫眞界に於ては、これが、殊にひどい。すべて形式を重んじて、形や色彩に強い執着を有するが、それに却つて捕はれて内容が貧弱になる様な場合もあることは、沸蘭西や伊多利を始めてとする、所謂ラテン民族に通有な精神現象である。その他、沸蘭西あたりの藝術界では政治的、因習的關係がなかなか六ヶ敷しい様な話しも聞いて居る。こんな處は、我國の畫壇には、輸入したくないものである。誰か書いても傑作は傑作、凡作は凡作である。大家の作が、どことなくしつかりした所のあることも争はれない事実であるが、同時に亦、それらの人々の作品が、一つ残らず皆傑作では無いと云ふことも事実である。何の誰それが書いたからと云ふ單なる理由のみで、その作それ自身の藝術的價值を検討することもなく、無闇な大金を拂つて買入れて自慢するなんて

無闇な大金を拂つて買入れて自慢するなんて

こと程、およそ馬鹿氣た事はない。我々は、  
 藝術品それ自身を觀賞するのであつて、藝術  
 家の名前を買うのではない。この傾向は殊に  
 日本画の方に甚だしい様に聞いて居るが、こ  
 ん傾向があると云ふ事は、結局、國民の藝術  
 的觀賞力が不足して居ると云ふことの表はれ  
 に他ならない。そうでなければ虚榮心の  
 表はれか、どちらかであらう。我々には、少  
 くとも私には、大家の駄作よりも、無名作家  
 の傑作の方が餘程有り難い。文学などに於て  
 も同じ事が云へる。大家と云ふ鉤がつくと  
 録でも無い作まで引つ張り出して来て、全集  
 などに入れて、有り難がつて讀んで居る。いくら  
 大家だとして、ほんとうの傑作と云ふものは、  
 そうぼうに澤山あるものではない。かの世界  
 的文豪ゲーテにさへ駄作があると云ふではな  
 いか。くだらない因習や、  
 政治的勢力のために、ほんとうに才のある、  
 隠れた若い画家たちの正當に認識されるこ  
 とが妨害されるならば、それは、藝術界に於

1 1 大なる損失を蒙るにや。我が  
 2 宮崎美術協会の活動によつて、それらの無名  
 3 の作家たちが世に紹介されることが出来たな  
 4 らば、協会の目的は十二分に達せられたるも  
 5 のと云はなければならぬ。(完)  
 6  
 7 而して、連年の経済的困窮、  
 8 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 9 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 10 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 11 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 12 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 13 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 14 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 15 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 16 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 17 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 18 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 19 及び、経済的困窮の甚しきこと、  
 20 及び、経済的困窮の甚しきこと、

ける大きな損失でなければならぬ。我が  
 宮崎美術協会の活動によつて、それらの無名  
 の作家たちが世に紹介されることが出来たな  
 らば、協会の目的は十二分に達せられたるも  
 のと云はなければならぬであらう。(完)



# 宮崎新

## 宮崎美術協會第一回 作品展覽會感想

宮崎高等農林學校教授 北尾淳一郎



この一文は、展覽會直後に書いたものであるが、或る手違ひから、今まで發表が遅れたのである。來春は又第二回展が催されるといふやうな評判もきいてゐるのでここに小さな感想を

せて貰ふことにしたわけである。藝術家の天才と、世間の評價とが必ずしも一致しないことを、我々は常に目撃し、また残念に思つ

てゐる。中央の何々展覽會に一度入選すれば、その人は假令、その後十年一日の如く舊套陳腐な我々に何らの感興をも起さしめないやうな繪ばかり書いてゐても世間では一ぱしの大家のやうに考へてゐるやうな場合は、いくらもあることであらう。一體我國では物事が中央に集まりすぎてゐる、殊に畫壇において左様である、もともと我國の洋畫界は、主としてフランスあたりの影響を受けてゐるのであらうから、こうした傾向になることも自然の勢ひであるかも知れないがそれにしても、田舎があまりに閑却され過ぎてはゐないだらうか。文化の極端なる中央集中

宮崎美術協會第一回  
作品展覽會感想  
宮崎高等農林學校教授  
北尾淳一郎

この一文は、展覽會直後に書いたものであるが、或る手違ひから、今まで發表が遅れたのである。來春は又第二回展が催されるといふやうな評判もきいてゐるのでここに小さな感想をのせて貰ふことにしたわけである。藝術家の天才と、世間の評價とが必ずしも一致しないことを、我々は常に目撃し、また残念に思つ

てゐる。中央の何々展覽會に一度入選すれば、その人は假令、その後十年一日の如く舊套陳腐な我々に何らの感興をも起さしめないやうな繪ばかり書いてゐても世間では一ぱしの大家のやうに考へてゐるやうな場合は、いくらもあることであらう。一體我國では物事が中央に集まりすぎてゐる、殊に畫壇において左様である、もともと我國の洋畫界は、主としてフランスあたりの影響を受けてゐるのであらうから、こうした傾向になることも自然の勢ひであるかも知れないがそれにしても、田舎があまりに閑却され過ぎてはゐないだらうか。文化の極端なる中央集中

**聞**

編輯 岩谷 官  
 行 市 崎  
 發行 廣 州  
 印刷 廣 州  
 人 所 目 録

---

**ホーホ**

加工百般  
 見積り書  
 街下令  
 一俵五匁  
 (一俵五匁)

香板は 東洋ホーホ九州支所  
 鹿児島市山王町本通

# 想 尾 淳 一 郎

が、一種の危険を伴ふものであることはフランスの例に見ても凡そうなづかれることである、あれほど、世界中から寄つてたかつて打のめされても、なほ命脈 保つてゐる、あのドイツの底力は、結局地方に分散した健全な、優秀な精力の組織的賜物に他ならない。ドイツの藝術が一般に非常なる深刻性を有することはそれが常に樞土といふ一つの大きな背景の上に土台の上に築かれ、芽生へたものであるからである、フランスに即ちパリ、パリは即ちフランスといふ様な状態は決して望ましくないものでない、ドイツでは地方地方に非常によい景色の所が澤

山あるが優れたる畫家の中には、それらの中の一つの地方の美景を寫し出すことに一生を捧げ又それによつて、確固たる名聲を勝ち得た、又得てゐる人々がいくらかもある。大都會の殺人的喧騒の中に青白くうごめいてゐる人間たちの病的情景を描き出すのが尖端的藝術であると同時に、大地に根を下ろした様な田園の生活や、又搖籃の如く我々の心を包む大きな静かな神秘的田舎の景色を寫すことも亦藝術の一つの大きな本質的な分野でなければならぬ。人材の中央集中がよし一般的傾向であるとしても我が宮崎には世間の評價や、浮世的の地位などを絶した隠れたる天才乃至はその芽生への幾つか必ずひそんでゐることを私は確信する、神武大帝の舊國、皇祖發祥の靈地たる我宮崎は唯にその歴史の悠久を誇るのみならず、又實に海内無比の風景環境を以つて

が、一種の危険を伴ふものであることはフランスの例に見ても凡そうなづかれることである、あれほど、世界中から寄つてたかつて打のめされても、なほ命脈 保つてゐる、あのドイツの底力は、結局地方に分散した健全な、優秀な精力の組織的賜物の賜物に他ならない。ドイツの藝術が一般に非常なる深刻性を有することはそれが常に樞土といふ一つの大きな背景の上に土台の上に築かれ、芽生へたものであるからである、フランスに即ちパリ、パリは即ちフランスといふ様な状態は決して望ましくないものでない、ドイツでは地方地方に非常によい景色の所が澤

山あるが優れたる畫家の中には、それらの中の一つの地方の美景を寫し出すことに一生を捧げ又それによつて、確固たる名聲を勝ち得た、又得てゐる人々がいくらかもある。大都會の殺人的喧騒の中に青白くうごめいてゐる人間たちの病的情景を描き出すのが尖端的藝術であると同時に、大地に根を下ろした様な田園の生活や、又搖籃の如く我々の心を包む大きな静かな神秘的田舎の景色を寫すことも亦藝術の一つの大きな本質的な分野でなければならぬ。人材の中央集中がよし一般的傾向であるとしても我が宮崎には世間の評價や、浮世的の地位などを絶した隠れたる天才乃至はその芽生への幾つか必ずひそんでゐることを私は確信する、神武大帝の舊國、皇祖發祥の靈地たる我宮崎は唯にその歴史の悠久を誇るのみならず、又實に海内無比の風景環境を以つて

恵まれてゐる、この環境に、もしも天才が居ないとすれば出ないと思はれ、これほど大きな矛盾はない。今これらの人々が、折に觸れ手に取つての感興は、必ず現れて優秀なる多くの作品をうみ出すに至るであらう。私は宮崎美術協会の生誕を心から祝福するものゝ一人である。

第一回作品展覧會は、出品の相當多にかゝはらず、やゝ淋しい感じがしないでもない、この數年の畫壇の作品、殊に我國のそれから薄ざかつてゐる私としては、その方面の最近の様子がよくわからないので、批評などすべき筋合でないのではあるが、頼まれるまゝに、書つらねてみたいと思ふ。

川村伊作氏の「椿」は、落付いた、澁い感じの實に気持ちのよい作品であると思つた。その附近にあつた小池氏の裸婦立像も、さつぱりしたおとなしい、いや味のなない繪である。南郷梓氏の「秋日の校庭」には、素晴らしい色が出てゐるが、おしいことに構圖が悪い。同氏の「床の前にて」などの行き方からみると余程しつかりした腕の持ち主のやうに思はれる。壹岐茂氏の行き方も、悪気がなくて面白いが、唯何となく物足りないと思ふ。

じのするのはどういふわけであらう。少女像、甲子晴着などある程度の好感が持てる、西澤芳郎氏の「景」もすつきりした、よい感じである、私は、向つて右の方の「秋景」を取りたい、板本直直氏の「焚火」は、しつかりした寫實に終始してゐるのがうれしい。藤田氏の數ある作品のなかで、私は自畫像を最も優れた作と考へてゐるがそれが出品されてゐなかつたのは残念である。第二室杉田秀夫氏の習作ABは、素晴らしいものだ。油繪の方では先づ特選賞に價するものであらう、唯同氏の住んでゐる藝術的雰圍氣が全然西洋式であるため一部の人々から充分に理解されてゐないのではないかと思はれるやうな筋のあることは非常に遺憾なことである。田中氏の作品のうちでは、青島の風景を非常に面白く拜見した、何かの小冊子で同氏作版畫の、逢初川の傳説を扱つたものを見て、その洗練されたる藝術境に、感心した。

水彩の方では、他の多くの人々の佳作のうちでも、古川重明氏の「秋庭」と甲斐鐵夫氏の「花壇」とが斷然光彩を放つてゐるやうに思はれた。私は展覽會のすべての作品を通じてこの二つのものに最も心をひかれたことを告白する。

恵まれてゐる、この環境に、もしも天才が居ないとすれば出ないと思はれ、これほど大きな矛盾はない。今これらの人々が、折に觸れ手に取つての感興は、必ず現れて優秀なる多くの作品をうみ出すに至るであらう。私は宮崎美術協会の生誕を心から祝福するものゝ一人である。

第一回作品展覧會は、出品の相當多にかゝはらず、やゝ淋しい感じがしないでもない、この數年来畫壇の作品、殊に我國のそれから薄ざかつてゐる私としては、その方面の最近の様子がよくわからないので、批評などすべき筋合でないのではあるが、頼まれるまゝに、書つらねてみたいと思ふ。

川村伊作氏の「椿」は、落付いた、澁い感じの實に気持ちのよい作品であると思つた。その附近にあつた小池氏の裸婦立像も、さつぱりしたおとなしい、いや味のなない繪である。南郷梓氏の「秋日の校庭」には、素晴らしい色が出てゐるが、おしいことに構圖が悪い。同氏の「床の前にて」などの行き方からみると余程しつかりした腕の持ち主のやうに思はれる。壹岐茂氏の行き方も、悪気がなくて面白いが、唯何となく物足りない感

じのするのはどういふわけであらう。少女像、甲子晴着などある程度の好感が持てる、西澤芳郎氏の「景」もすつきりした、よい感じである、私は、向つて右の方の「秋景」を取りたい、板本直直氏の「焚火」は、しつかりした寫實に終始してゐるのがうれしい。藤田氏の數ある作品のなかで、私は自畫像を最も優れた作と考へてゐるがそれが出品されてゐなかつたのは残念である。第二室杉田秀夫氏の習作ABは、素晴らしいものだ。油繪の方では先づ特選賞に價するものであらう、唯同氏の住んでゐる藝術的雰圍氣が全然西洋式であるため一部の人々から充分に理解されてゐないのではないかと思はれるやうな筋のあることは非常に遺憾なことである。田中氏の作品のうちでは、青島の風景を非常に面白く拜見した、何かの小冊子で同氏作版畫の、逢初川の傳説を扱つたものを見て、その洗練されたる藝術境に、感心した。

水彩の方では、他の多くの人々の佳作のうちでも、古川重明氏の「秋庭」と甲斐鐵夫氏の「花壇」とが斷然光彩を放つてゐるやうに思はれた。私は展覽會のすべての作品を通じてこの二つのものに最も心をひかれたことを告白する。

實に、何ともいへぬよい色である高松岩男氏の「雨晴」も實によく氣分が出てゐる。古川重明氏の「虫取り」その他は既に何處かの展覽會の入選作ださうであるから、ここでは、贅筆を加へない。

元來私は、寫眞の方は、自分でもやつてゐるけれども繪の方は素人でもよくわからないのであるが、唯前にも云つたとほり我國の畫界がフランスの、そのの直流であるために、どうかすると形や色彩の點において非常にすぐれてゐるにもかかはらず内容的の深さにおいてやや缺けてゐる點がないでもないやうに、しばしば感ぜられることは残念なことである。寫眞界においては、この傾向が殊にひどいすべて、形式を重んじて形や色彩に強い執着を有するが、それに却て捕はれて内容が貧弱になる様な場合もあることは佛蘭西や伊太利をはじめとする所謂ラテン民族に通用な精神現象である。その他佛蘭西あたりの藝術界では政治的、因習的關係がなかなか六ヶ敷い様な話も聞いてゐるがこんな點は我國の畫壇には輸入し度くないものである。誰が書いても傑作は傑作凡作は凡作である、大家の作が何所となくしつかりした所のあるところと争はれない事實であると同時にそれらの人々の作品が一つ残らず皆傑作ではないといふことも亦事實である。何の誰れが書いたかからといふ單なる理由のみで、その作品それ自身の藝術的價値を検討することもなく無闇な大金を拂つて買入れて自慢するなどといふことほど（藝術史の研究といふ様な立場の場合別として）凡そ馬鹿氣たことはない。我々は藝術品それ自身を觀賞するのであつて藝術家の名前を買うつてではない。この傾向は殊に日本畫の方に甚だしい様にも聞いてゐるが、こんな傾向があるといふことは結局、國民の藝術的觀賞力が不足して居るといふことの表はれに他ならない、そうでなければ虚榮心の表はれかどちらかであらう。くだらない因習や政治的勢力のためにほんとうに才のある隠れた若い畫家たちの正當に認識されることが妨害されるならば、それは藝術界において大きな損失でなければならぬ、我宮崎美術協會の活動によつて、それらの隠れたる作家たちが世に紹介されることが出来たならば協會の目的は十二分に達せられたるものと云はなければならぬであらう。（一九百卅四年十二月七日）

實に、何ともいへぬよい色である高松岩男氏の「雨晴」も實によく氣分が出てゐる。古川重明氏の「虫取り」その他は既に何處かの展覽會の入選作ださうであるから、ここでは、贅筆を加へない。

元來私は、寫眞の方は、自分でもやつてゐるけれども繪の方は素人でもよくわからないのであるが、唯前にも云つたとほり我國の畫界がフランスの、そのの直流であるために、どうかすると形や色彩の點において非常にすぐれてゐるにもかかはらず内容的の深さにおいてやや缺けてゐる點がないでもないやうに、しばしば感ぜられることは残念なことである。寫眞界においては、この傾向が殊にひどいすべて、形式を重んじて形や色彩に強い執着を有するが、それに却て捕はれて内容が貧弱になる様な場合もあることは佛蘭西や伊太利をはじめとする所謂ラテン民族に通用な精神現象である。その他佛蘭西あたりの藝術界では政治的、因習的關係がなかなか六ヶ敷い様な話も聞いてゐるがこんな點は我國の畫壇には輸入し度くないものである。誰が書いても傑作は傑作凡作は凡作である、大家の作が何所となくしつかりした所のあるこ

とが争はれない事實であると同時にそれらの人々の作品が一つ残らず皆傑作ではないといふことも亦事實である。何の誰れが書いたかからといふ單なる理由のみで、その作品それ自身の藝術的價値を検討することもなく無闇な大金を拂つて買入れて自慢するなどといふことほど（藝術史の研究といふ様な立場の場合別として）凡そ馬鹿氣たことはない。我々は藝術品それ自身を觀賞するのであつて藝術家の名前を買うつてではない。この傾向は殊に日本畫の方に甚だしい様にも聞いてゐるが、こんな傾向があるといふことは結局、國民の藝術的觀賞力が不足して居るといふことの表はれに他ならない、そうでなければ虚榮心の表はれかどちらかであらう。くだらない因習や政治的勢力のためにほんとうに才のある隠れた若い畫家たちの正當に認識されることが妨害されるならば、それは藝術界において大きな損失でなければならぬ、我宮崎美術協會の活動によつて、それらの隠れたる作家たちが世に紹介されることが出来たならば協會の目的は十二分に達せられたるものと云はなければならぬであらう。（一九百卅四年十二月七日）